

第17回 鞠智城東京シンポジウム

渡来系技術と 古代山城

— 渡来文化の重層性 —

鞠智城

令和5年10月1日(日)

会場：明治大学アカデミーコモンアカデミーホール
東京都千代田区神田駿河台1-1

主催：熊本県、熊本県教育委員会、明治大学国際日本古代学研究クラスター

後援：文化庁、明治大学社会連携機構、熊本県文化財保護協会、山鹿市教育委員会、
菊池市教育委員会、菊池川流域古代文化研究会、肥後古代の森協議会

第17回 鞠智城東京シンポジウム

「渡来系技術と古代山城・鞠智城」

日時：令和5年10月1日（日）13:00～17:00（受付12:00～）

会場：明治大学アカデミーコモン アカデミーホール

（東京都千代田区神田駿河台1-1）

主催：熊本県、熊本県教育委員会、明治大学国際日本古代学研究クラスター

後援：文化庁、明治大学社会連携機構、熊本県文化財保護協会、山鹿市教育委員会、

菊池市教育委員会、菊池川流域古代文化研究会、肥後古代の森協議会

- 日 程 -

12:00	受付開始／開場
12:20～12:30	鞠智城映像上映
12:30～12:50	キャラクターステージ（こうう君&くまモン）
13:00～13:15	開会 主催者挨拶 熊本県・明治大学（来賓紹介含む）
13:15～13:35	報告① 「鞠智城跡に残る渡来系技術」 長谷部善一（熊本県教育委員会歴史公園鞠智城・温故創生館 館長）
13:35～14:15	報告② 「弥生時代の渡来系技術の実像」 石川日出志氏（明治大学国際日本古代学研究クラスター 代表）
14:15～14:30	（休憩）
14:30～15:10	報告③ 「古代山城にみる渡来系技術」 亀田修一氏（岡山理科大学特任教授）
15:10～15:50	報告④ 「鞠智城と朝鮮三国の山城」 田中俊明氏（滋賀県立大学名誉教授）
15:50～16:00	（休憩）
16:00～17:00	パネルディスカッション コーディネーター 佐藤信氏（くまもと文学・歴史館 館長） パネラー 報告者4人
17:00	閉会

令和5年度（2023年度）鞠智城シンポジウム講師等一覧

【報告・パネリスト】

○石川日出志（いしかわ ひでし）

明治大学 教授。専門は日本考古学（主に弥生時代）。修士（文学）。

明治大学大学院文学研究科博士課程中退。明治大学文学部助手、専任講師、助教授を歴任して現職。

著書に『農耕社会の成立』岩波書店、『「弥生時代」の発見 弥生町遺跡』新泉社、『考古資料大観1 弥生・古墳時代 土器1』（責任編集）小学館、『季刊考古学・別冊 29 泉坂下遺跡と再葬墓研究の最前線』（編集）雄山閣ほか。

○龜田修一（かめだ しゅういち）

岡山理科大学 特任教授。専門は東アジア考古学。博士（文学）。

九州大学大学院文学研究科修士課程修了。岡山理科大学助手、講師、助教授、教授を歴任して現職。

著書に『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館、『吉備の古代寺院』（共著）吉備人出版、『考古資料大観3 弥生・古墳時代 土器3』（責任編集）小学館、『古墳時代研究の現状と課題（上・下）』（編集）同成社ほか。

○田中俊明（たなか としあき）

滋賀県立大学 名誉教授。専門は朝鮮古代史、古代日朝関係史。

京都大学大学院文学研究科博士課程修了。堺女子短期大学講師、助教授、滋賀県立大学教授を歴任して現職。

著書に『大伽耶連盟の興亡と「任那」－伽耶琴だけが残った』吉川弘文館、『韓国の古代遺跡 1新羅篇』（共著）中央公論社、『韓国の古代遺跡 2百濟・伽耶篇』（共著）中央公論社、『高句麗の歴史と遺跡』（編著）中央公論社ほか。

○長谷部 善一（はせべ よしかず）

熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館 館長。専門は日本考古学（古墳時代）。学芸員。

平成3年4月に熊本県教育庁に入庁。文化課、装飾古墳館、岩手県教育委員会（併任）等を経て、令和4年4月より現職。

著書に『企画展図録 12 古代たら製鉄 復原の記録』（編著）熊本県立装飾古墳館、『全国の装飾古墳5中国・四国地方の装飾古墳』（編著）熊本県立装飾古墳館、『熊本県文化財調査報告 149 竈門寺原遺跡 1』熊本県教育委員会ほか。

○コーディネーター：佐藤 信（さとう まこと）

東京大学名誉教授、ぐまもと文学・歴史館 館長、横浜歴史博物館 館長。専門は日本古代史。博士（文学）。

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。奈良国立文化財研究所（平城京跡調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部教授、東京大学大学院人文科学研究科教授、大学共同利用機構法人人間文化研究機構理事を歴任して現職。

著書に『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館、『古代の遺跡と文字資料』名著刊行会、『出土資料の古代史』東京大学出版社、『古代の地方官衙と社会』山川出版社、『大学の日本史 教養から考える歴史へ1』山川出版社、『日本古代の歴史6列島の古代』吉川弘文館ほか。

鞠智城に残る渡来系技術

長谷部善一（熊本県教育委員会）

1 はじめに －鞠智城とは－

鞠智城は熊本県北部、現在の山鹿市と菊池市の2市にまたがる米原台地上に位置する7世紀後半、今から約1,350年頃前にヤマト政権によって築かれた古代山城である。

当時朝鮮半島では高句麗、百済、新羅の三国の争いに中国の唐が加わり、社会的な緊張が続き、660年、唐・新羅連合軍によって日本と友好関係にあった百済が滅ぼされた。日本（当時は「倭」と呼称）は百済の復興を支援するため援軍を送るが、663年に白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗し、今度は唐・新羅による国内への侵攻の脅威に直接対処せざるを得ない状況となった。

そこで、ヤマト政権は西日本を中心に防衛体制を形成し、九州対馬に最前線基地として金田城（長崎県）を築城し、当時、「遠の朝廷」と呼ばれていた大宰府を防衛するために大野城（福岡県）・基肄城（佐賀県・福岡県）が築かれている。これらの背後に位置する鞠智城は城として防衛施設であったと同時に、食料や武器を最前線へ供給するための兵站基地として同じ時期に築城されたと考えられる。

鞠智城は築城に関する文献の記載はないが、これまでの発掘調査成果等から7世紀後半頃に、大野城・基肄城とともに築城されたと考えられている。698年には大野・基肄の2城とともに鞠智城の「續治」（修理）がおこなわれたとの記事¹があり、初めて鞠智城が文献に出てくる。その後、朝鮮半島の緊張緩和が進むと城としての機能を維持しつつ、「コ」の字型配列の大型建物や八角形建物など、役所としての機能も整備された。更に倉庫群は掘立柱建物から礎石建物に変化し、米などを貯蔵した倉庫群が大型化するなど城の機能を変化させながら存続した。

鞠智城は、対外的な緊張がなくなった時点で廃止された他の古代山城とは違い、古代律令国家にとって地域支配に重要な城として約300年間存続し、平安時代末にその役割を終え「米原長者」の言い伝えを残し、歴史から消えた。



鞠智城米原地区

2 これまでの鞠智城研究の取り組み

昭和 42 年（1967 年）に地元研究者により第 1 次発掘調査が実施された後は、熊本県教育委員会が主体となり、令和 4 年（2022 年）までに 37 次に及ぶ発掘調査を実施してきた。その結果、周囲約 3.5 km、面積約 55ha に及ぶ城域、うち南・西側の城域線上で土壘、3 箇所の城門、長者原地区から長者山地区にかけて 72 棟の建物群、国内では初確認となる貯水池跡など多くの遺構を確認した。更に国内の古代山城からは初めての出土となる「銅造菩薩立像」が出土するなど、国内の古代山城の中でも調査・研究が最も進んでいる城の一つとなつた。

鞠智城を管理する鞠智城・温故創生館では、平成 24 年（2012 年）3 月に刊行した『鞠智城 II - 鞠智城跡第 8 次～32 次調査報告』²で得られた学術的知見を熊本県文化財専門職員のみならず外部の研究者にも広げるため同年から、若手研究者を対象に「特別研究」として研究の公募を開始した。公募する分野は考古学、文献史学、歴史地理学、建築学、土木学及び美術史学等、多岐にわたり、採用された研究者には研究費を助成するなど、新たな視点からの研究を進めてきた。その研究成果は毎年、成果報告会を開催するとともに、『鞠智城と古代社会』として取りまとめ公開している。これまで延べ 48 名の研究者が鞠智城研究を深めできている。

また、調査研究事業とは別に、平成 16 年（2004 年）5 月の史跡指定を契機に、更に鞠智城を知りいただき研究の深化を図り全国の古代山城との比較研究等を行い、研究促進を図るため佐藤信氏のコーディネートのもと多くの古代山城研究者、各分野の皆様の御協力によりシンポジウムを開催し研究の蓄積を図ってきた。史跡指定を受けた同年には地元菊鹿町（現・山鹿市菊鹿町）で第 1 回シンポジウムを開催した。更に翌年には鞠智城を全国の方々に知りたいため「鞠智城東京シンポジウム」を開催し、その後、大阪府、京都府、福岡県でも開催してきた。令和 2 年（2020 年）から流行した新型コロナ感染症対策期間も、オンライン開催や、熊本県内で感染症対策を取ったうえで継続し開催してきた。本年度、東京での開催は平成 30 年（2018 年）以降、5 年振りの開催となる。改めて、鞠智城を全国の方に知りたい更なる研究の深化を図って参りたい。

3 鞠智城に残る渡来系技術

ここでは本日のテーマに沿いこれまでの発掘調査及び研究の成果から、鞠智城に残る渡来系技術について紹介する。そのためここでは昨年度に熊本市で開催した鞠智城シンポジウム「渡来系技術から見た古代山城・鞠智城」をベースにこれまでの研究で渡来系技術と報告されてきた内容を改めて紹介し、最後に近年私が研究に取り組んでいる情報を交え報告したい。

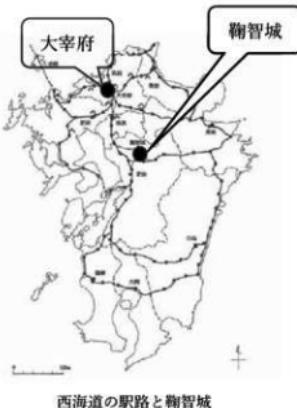
(1) 選地

最初にも述べたが、鞠智城は古代山城としては最も南に位置しており大宰府から直線距離で約60kmの位置にある。最も近い朝鮮式山城である基肄城からもほぼ同距離の位置に位置し、神籠石系山城として知られている高良山神籠石（福岡県久留米市）、女山神籠石（福岡県みやま市）からも当時から国境であった筑肥山地の山塊群により遠く隔てられている。

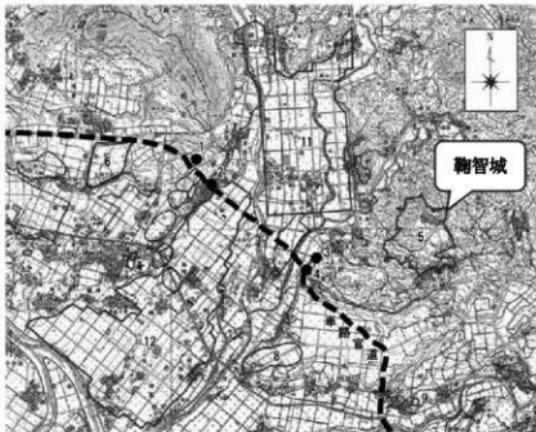
平成23年（2011年）8月に第2回古代山城サミット（事務局山鹿市・菊池市）のブレイントレーニングとして烽火リレー実験³が実施された。実験の結果、大宰府政庁跡から鞠智城まで14箇所（約100km）を結び、約1時間で烽火が届いている。

遠く離れた肥後国北部でも緊急時にもこれだけ短い時間で連絡ができたことから大宰府周辺で万が一戦いが生じても兵站を担う城として十分に連絡がつくとして、鞠智城がこの地に選地されたと考えられる。

また、鞠智城が所在する菊池川中流域は肥後国内でも有数の穀倉地帯で古代の条里である菊鹿盆地を有し、食糧の確保と言う観点が選地にあたっての重要な要素だったともえられる。しかし、他の古代山城と比べ低い丘陵上を選地している点や、外部からの視認性の低



西海道の駅路と鞠智城



車路官道（点線）と鞠智城

いこと等も挙げられる。そこで肥後国北部の米原台地に選地された理由を考えてみたい。

鞠智城が立地する熊本県北部域は約9万年前に堆積した阿蘇4火砕流により覆いつくされ、菊池川等による浸食で河岸段丘を形成し、更に流域に沿い沖積平野を形成する。鞠智城は火砕流堆積物上の小規模な平坦部を取り込む形で周囲に小河川による谷地形を利用し、独立した丘陵と自然の土壘状地形を呈する。南側にはうてな台地が近接していることから直接城内を望むことはできず外部からの視認性は低い。現在でも城の位置を外部から特定するのは難しい。

大野城、基肄城、鬼城山（岡山県総社市）などの大半の古代山城は、外部からの視認性を意識しているが、鞠智城では外から見えない分、内部の平坦地に建物を集中的に配置するなど他の城との違いもある。このような土地を有していたことが、ここに築城し兵站基地として秘匿性を持たせる意味があったとも考えられる。戦う城、見せることで威圧する城、そして鞠智城のように兵站のため秘匿する城としての築城思想があった可能性も高い。

（2）土壘・城門

選地のところでも述べたが、鞠智城が築城されたこの地域は火砕流堆積物が削り出した地形がよく残り、随所に瘦せ尾根状地形が残る。うち、復元建物群の整備が進む長者原地区南側に所在する土壘線上には「堀切門」、「深迫門」の2つの城門が確認され、南側、西側土壘線の結節点では「池ノ尾門」が確認されている。

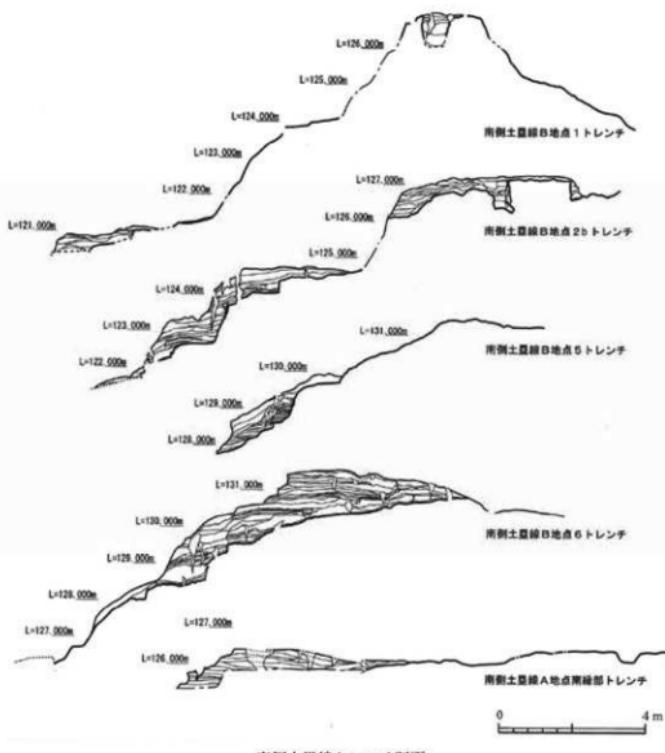
南側土壘線上に所在する2つの城門は、南側に車路（古代官道の一つ）が東西方向に整備されていることから、人の出入りを意識した城門と考える。また、南・西土壘の接点に所在する池ノ尾門は、西側に菊池川の支流である内田川がすぐ近くにまで流路を寄せていることから、有明海とつながる川船を使った物資搬入路として機能していた城門であると考える。

これら城門は土壘線上に位置しており城として防衛施設の一翼を担う。城跡を考える上で重要な定義の一つに、岡田茂弘氏⁴が示されている基準を用いると、「防衛的構造物＝自由な出入を規制する施設の遺構の存在」がある。



深迫門跡発掘調査地区（中央は花崗岩製唐居敷）

このような地形を利用し当時、我が国に城壁築城技術の一つとしてもたらされた「版築」技術を用いて積まれた土塁が発掘調査で確認されている。南側土塁では尾根地形を段築状に成型し高所側に版築を用い土塁も築かれる。現存している土塁は版築の基底部だが、その幅は5m以上に及ぶところもありそこから復元される版築土塁の高さは数メートルに及ぶ。西側土塁線上でも版築技術を用いた場所が発掘調査で確認されており、城外に向い急斜面上の崖線に土塁が築かれた土塁が確認できる。



南側土塁線トレンチ断面

(3) 貯水池跡

長者原地区の西側、米原集落の南側に所在する谷部から平成8年（1996年）に古代山城では初となる貯水池跡を確認している。調査の結果、約5,300m³の貯水池であることが確認され、貯水池内からは後に触れるが鞠智城内で使用されていた建築材や祭祀に使用された

であろう木製品、銅造菩薩立像が出土している。

令和3年度（2022年度）鞠智城「特別研究」事業において全赫基氏⁵は、鞠智城で確認された貯水池跡を朝鮮半島の古代山城の一つである河南二聖山城^{にぜいさんじょう}貯水池跡と比較した。その結果、韓国に残る古代山城の集水施設における祭儀的行為に類似性があるとし、貯水池跡出土遺物の比較等から古代朝鮮渡来系技術の一つと指摘している。また、令和4年度（2022年度）熊本県で開催した鞠智城シンポジウムで小山田宏一氏⁶は、鞠智城で確認された貯水池跡が上流側と下流側で約9mの比高差があること、また、水を貯める施設であることには注目し、上流側・下流側の貯水池内で与えられた役割が違っていたのではないかと指摘した。上流部では湧水を利用する泉井と貯木場として利用し、下流では粘土で流れを止め、水を溜め、曲池として利用していたのではないかとの見解を示した。貯水池跡が曲池であると仮定した場合、朝鮮半島の事例を提示し貯水池跡の形状等から、新羅からの影響を示唆している。併せて、貯水池跡から検出されている堤防状構造で確認された「敷粗朶」について、地盤工学で使用される補強土工法と言う用語を用い、中国江南地方の良渚文化期（紀元前2,000年代）に登場したこの技術を、東アジア起源の技術として捉えている。

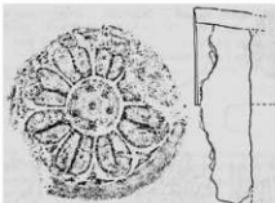
（4）出土遺物

① 瓦

鞠智城では軒丸瓦、丸瓦、平瓦の3種類の瓦が出土している。うち軒丸瓦には、「単弁八葉蓮華文」と呼ばれる蓮の花をかたどった文様が施される。これは朝鮮半島の瓦の文様の影響を強く受けたものと考えられている。

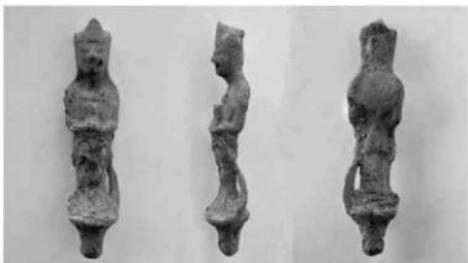
② 銅造菩薩立像

菩薩立像是貯水池跡の池尻部底部から出土した。高さ12.7cm、最大幅3.0cmで横から見ると体部がS字曲線を描く。顔の表情は丸みを帯び穏やかで、三面の宝冠、肩まで垂らした垂髪、両肩にかけられた天衣などもよく表現される。また、舍利容器と考えられる持物を胸の前で、両手で抱えるように持つ。この仏像は発掘調査の成果と、身体的特徴等から7世紀後半の百濟仏で、朝鮮半島から持ち込まれた可能性が高いのではないかと考えられてきた。



軒丸瓦（単弁八葉蓮華文）

令和4年（2022年）鞠智城「特別研究」事業で『鞠智城跡II』報告書刊行以来、初めて、仏教美術の観点から研究が加えられた⁷。引き続き菩薩立像と鞠智城築城の関係について研究が進むことを期待したい。



貯水池跡出土 銅造菩薩立像

（5）花崗岩加工技術

鞠智城では、鞠智城II期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）に城を管理する建物や八角形建物などの施設が整備され城として最も充実した時期に入っている。長者原地区東側から上原地区東側にかけて、「コ」字形に配置された掘立柱による建物群や、総柱の倉庫群が作られる。更に、鞠智城III期（8世紀1四半期後半～第3四半期）以降、掘立柱建物から礎石建物に転換が図られ長者原地区東側一帯において掘立柱建物から小型礎石建物への転換が始まる。

鞠智城では、これら礎石建物石材の多くに花崗岩が使用されるとともに、3つの城門の唐居敷にも花崗岩が使用され、堀切門跡では最大長3mを超える石材が確認されている。鞠智城周辺は先に選地のところで地形・地質を火碎流堆積物上に築城されていると解説したが、鞠智城灰塚から南側、西側土塁線付近から西側、有明海側に向かって花崗岩地帯が断続的に存在し、その東端に鞠智城が所在している。現在でもこの周辺では山中に入ると1m前後の花崗岩転石を容易に見ることができる。鞠智城で見られる礎石等に使用される加工は主に、簡易的にノミ等による敲打技法による整形で形そのものを割り出すなどの整形は見られない。

国内では花崗岩の使用は古墳時代に始まり、菊池川流域の史跡大坊古墳⁸、史跡永安寺東古墳⁹（玉名市）では重量のかかる天井や樋石^{ひせき}に花崗岩が使用されている。しかし、その後は比較的加工が容易な溶結凝灰岩の使用が主流になる。その後、花崗岩が国内で再び注目を集めるのは6世紀末の飛鳥寺造営時以降の寺院造営まで待たなくてはならない¹⁰。

飛鳥寺造営時に百濟から版築技法や花崗岩加工技術が工人により直接持ち込まれ、その後の国内での寺院建築の技術が確立する。この技術が、その後本格化するヤマト政権による古代山城築城に用いられたと考えることもできる。古代山城築城に際に百濟からの亡命官人々の技術的指導があったことは文献等で確認されるが、城を築く場所（選地）、防衛目的の土壘（版築）の技術をどこに使うのかなど、城を築く思想がこの時、日本列島に伝えられてのではないかと考える。

最後に鞠智城で用いられている礎石群を構成する花崗岩技術に注目してきたなかで、鞠智城の礎石建物に一定数、花崗岩以外の種別の石材が用いられ続けていることに疑問があった。入手し易く、白色で見栄えのする花崗岩のみの礎石建物は1棟のみで、それ以外の礎石建物には花崗岩とこの地域では入手できない石材が混在して使用される。そこには各石材の産地から鞠智城築城や繕治のため集められた地方勢力の姿が垣間見える。

8世紀以降、防衛目的の城から倉庫群を併い役所機能を有する城に変貌していく鞠智城が、ヤマト政権から地方勢力にどう引き継がれ、地元肥後の地方勢力がどう関わってくるかに注目したい。



南側土壘線尾根上にある花崗岩転石

¹ 『続日本紀』文武天皇二年（698年）五月二十五日条

² 熊本県教育委員会「鞠智城跡II」—鞠智城第8次～32次調査報告—熊本県文化財調査報告第276集 平成24年（2012年）3月

³ 古代山城サミット山鹿・菊池大会実行委員会「第2回古代山城サミット山鹿・菊池大会報告書」平成23年10月開催

⁴ 岡田茂弘「三・城櫓の設置」「古代を考える多賀城と古代東北」青木和夫 吉川弘文館

⁵ 全藤基「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」「鞠智城と古代社会—第10号—」2022

⁶ 小山田宏一「『蓬莱系の土木技術とため池・山城』『蓬莱系技術から見た古代山城・鞠智城』鞠智城シンポジウム 2022 熊本県教育委員会

⁷ 村上幸奈「鞠智城出土・銅造菩薩立像についての考察」「鞠智城と古代社会—第11号—」2023

⁸ 玉名市教育委員会「史跡大坊古墳保存工事報告書」昭和54年（1979年）

⁹ 玉名市教育委員会「史跡永安寺東古墳・永安寺西古墳保存整備事業報告書」平成18年（2006年）

¹⁰ 廣瀬寛・高田祐一「日韓古代国家成立期における石工技術の比較研究」

弥生時代の渡来系技術の実像

石川日出志（明治大学国際日本古代学研究クラスター代表）

1. 比較考古学という視点

古代の鞠智城を考える場になぜ弥生時代のことを採り上げるのか？といぶかる方がおいでであろう。弥生時代を専門とするゆえ私の限界だが、「比較考古学」という視点の提示でもある。比較考古学とは、時間（時代）と空間（地域）が隔たった、すなわち直接関連し合うことのない対象を比較して、それ自体を掘り下げるだけでは気づきにくい事柄・問題をつかむものだ。物事を比較する際に、どうしても類似する部分に注目してしまいがちだが、大事なのはむしろ異なる面を見出し、それを評価することである。

私は弥生時代研究でも比較考古学の手法を意識して採り入れている。もちろん大きく時空を隔てる訳ではないし、相互に関連し合う場合がしばしばあるものの、対象にのめり込むのではなく、突き放して特徴をつかむのに有効である。マイナーな東日本から弥生時代研究に入っていたことがきっかけである。通常典型とされる西日本と比較して、それとは異なる東日本の特徴を評価したり、弥生時代の中でも前期と中期と後期を相互に対比して違いや変化を見出したりする。本日は、その比較の時間幅を1000年内外まで広げてみようという次第。大陸から導入された技術がどう受容され、変容したのかに焦点を絞る。

2. 弥生時代の大陸系技術

日本列島を舞台とする歴史を通覧した時、私は「弥生時代は大きな転換期だ」と評価する。それは、①自然の恵みを巧みに管理・利用する狩猟採集社会から稲作農耕社会に転換したこと、②この生業基盤をもとに社会変化を積み重ね、やがて古代国家形成する道を歩み入ること、③これにより日本列島に中と南・北の少なくとも三つの歴史世界が生み出されていくこと、の三点に注目しての評価である。そのもっとも大きなきっかけになったのは、朝鮮半島を含む大陸の社会との間で始まった様々な交渉である。

縄文時代にも朝鮮半島と北部九州との間で人・情報・技術の行き來はあった。しかしそれは朝鮮海峡を挟む地域内に限られ、そのことが社会に与えた影響は大きくはない。しかし、こうした限定的な往来が、次の新たな展開を用意した。つまり、海峡一帯で漁撈民として活動する海の熟達者の仲介によって、海峡を越えて人・情報・技術がもたらされ、それが根付くことによって日本列島の社会は大きく展開・転換する。本報告では、大陸系技術をキーワードにして、日常つくり使う器物である土器、当時の最先端技術である金属器、古代山城との比較という意味から土木技術をとり上げる。

（1）土器にみる大陸系技術

なぜ最初に土器を採り上げるのか。それは弥生時代の始まりを考える際に弥生土器の始まりがとても重要だからである。

日本考古学界ではかつて、縄文土器の時代を縄文時代、弥生土器の時代を弥生時代、土師器の時代を古墳時代としていた。各時代の土器は明確に識別できると思われていたからである。ところが1960

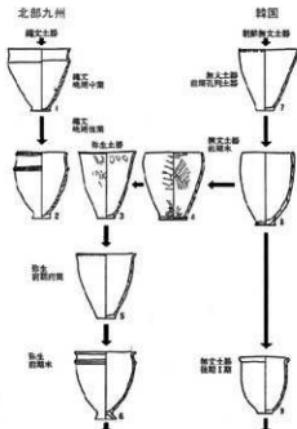


図1 弥生土器形成期に半島から土器形成技術が導入された（家根伴多1987「弥生土器の始まり」季刊考古学19）

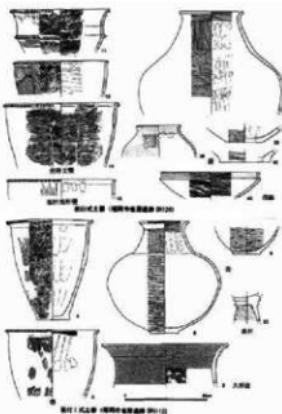


図2 夜白式と板付I式土器（「雀居7」2003）

年代から質・量とも資料が充実してくると境界が判別にくくなり、弥生時代は水稲作の採用＝食糧生産社会の始まり、古墳時代は前方後円墳＝広域にわたる各地の最有力首長どうしが連携した政治的社會の始まりをもって区分するようになった。弥生時代の始まりは遠賀川式土器の出現で定めていたが、1978年に遠賀川式でも最古の板付1式土器を伴う水田跡の下層から、従来縄文時代晩期末としてきた夜白式土器のみを伴う水田遺跡が発見されて、下層の夜白式土器を縄文／弥生のいずれと扱うか論争となつた。1990年代末になって弥生時代早期とみなす意見が多数派となるが、それでも夜白式を縄文土器とみる意見が根強く残つてゐる。しかし私は、弥生土器は縄文土器に大陸からの土器製作技術が採用され、かつ東日本の装飾原理が加わつて形成されたものであり、弥生時代の始まりを考える基準の一つと扱いたい。大陸からの土器製作技術を見てみよう。

そもそも縄文土器と弥生土器はどの地域でも連続的であつて、縄文土器から弥生土器へと断続するわけではない。しかし北部九州においては、夜白式土器に朝鮮半島系の土器製作技術が採用され、それが定着して板付I式以後の遠賀川式土器が形成される（図1・2）。その土器製作時技術とは、粘土帯を用いた外傾接合とハケメによる器面調整で、成・整形にかかる基本技術である。壺や甕の口頸部に段差を設けることや、甕の口縁部を刻む手法は在來の伝統で、壺に彩色を施す手法は遠く東日本から導入された。朝鮮半島の土器型式そのものが九州に根付くのではない。日常生活で用いる土器全般に、半島系の成・整形技術が採用されて土器型式が構造的な転換が起きた。その後はどうか。

前期末～中期前葉になると、朝鮮半島の土器型式そのもの導入される。円形粘土帶土器（水石里式）で、それは福岡県福岡市諸岡遺跡・小郡市横隈鍋倉遺跡、佐賀県小城市土生遺跡、熊本市八ノ坪遺跡といった数遺跡で集中して出土し、弥生土器との折衷土器もある。しかし他の遺跡ではごく少数しか見られない。土生遺跡や八ノ坪遺跡は青銅器を鋳造しており（図3）、当時の最先端技術である青

銅器鋳造を担う技術者の存在を物語るのであろう。これと対応するように韓国東南部の慶尚南道勒島遺跡・金海龜山洞遺跡・菜城遺跡では北部九州の城ノ越式や須玖I式土器がまとまって出土する。九州・韓国それぞれ特定の遺跡でまとまり、在来土器との折衷も見られるが、それが広く拡散することはない。双方の技術・情報・物資を担い携えた人々が、海峡を跨いで往来する、その拠点となった集落に足跡を残した。しかし、それら土器の製作技術が定着・拡散することはない。

その後しばらく土器に大陸の影響はないが、弥生時代後期になると再び北部九州の沿岸部に楽浪郡や三韓系の土器が出土する。これは社会的成長を遂げた北部九州の有力者層が積極的に大陸の物資と情報を求めたために往来が活発になったことを反映する。しかし、ここでも大陸系土器が北部九州の在来系土器に広く影響を与えることはない。

この次に、大陸から新たな土器製作技術が導入されるのは、5世紀における朝鮮半島南部の陶質土器の採用である（須恵器）。まったく新しい土器製作技術体系であり、弥生時代以来の酸化焰焼成の土師器との二重構造となる。それは古墳時代社会の全領域に及ぶ。

このように見てくると、弥生時代開始期である夜白式土器に、朝鮮半島系の土器製作技術が広範に受容されて構造変換を起こしていることの意味を過小評価してはならない。

（2）青銅器鋳造技術の導入

青銅器鋳造技術 前掲のように、前期末～中期初頭に円形粘土帶土器が北部九州の特定の集落で集中して出土する。この段階に北部九州に青銅器鋳造技術が導入され、朝鮮半島から青銅地金の供給を受

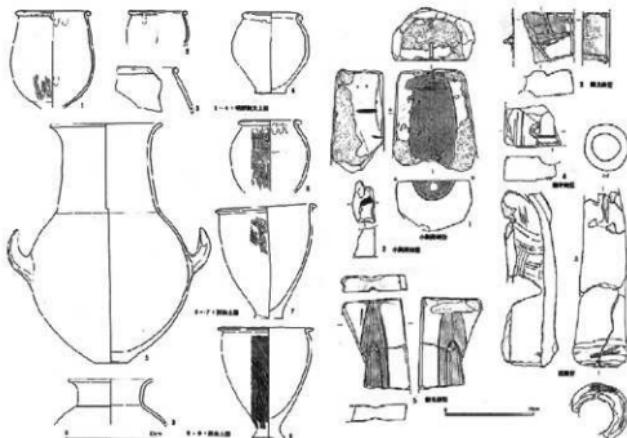


図3 熊本市八ノ坪遺跡の朝鮮系無文土器と青銅器鋳造具（『八ノ坪遺跡I・II・IV』2005-08）

けて生産が始まった（図3）。土器や石器が、製品が手元にあればある程度は模倣が可能であるのとは異なり、青銅器は地金の入手から製品のデザイン、鋳型の製作、鋳造作業、鋳造後の仕上げ加工まで体系的な技術を要するので、それを保持する専門技術者がいなければ製作も技術継承もできない。北

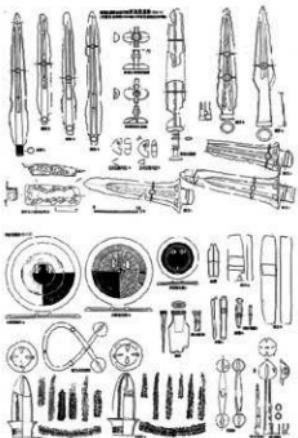


図4 朝鮮青銅器文化第3期の組成
（『咸平草浦里遺跡』1988）

部九州で遅くとも中期初頭に始まった青銅器鋳造は、その型式が朝鮮半島青銅器文化第3期（図4）に合致しており、鋳造技術者が海を渡って来たことは確実である。その実際はどうだったのだろうか。

北部九州で最初に鋳造された青銅器は、武器=銅剣・銅矛・銅戈、祭祀具=小銅鐸、利器=銅鑿・銅鉗であり、最近鋳型片が発見されて多錫鏡も製作されたと判明した。武器類は細形型式であることをはじめ朝鮮半島青銅器文化第3期の型式がそのまま継承されている。ところが全ての器種が揃うわけではなく、八手・竿頭・双頭・柄付などの鈴付青銅器が欠落する。音響を発する小銅鐸は、石製鋳型で鐸身と舌を別々に製作できるが、鈴付青銅器は鈴の中に鈴玉を入れ浮かせるために鋳型土（真土）を用いる。これら鈴付青銅器はいずれも外面に凹面による精細な幾何学文様を施しておらず土製鋳型による鋳造である。春日市タカウタ遺跡の調査によって細形銅矛・銅戈にも土製鋳型が採用されていることが確認されたもの、土製鋳型に

よる鈴付青銅器・精細凹面幾何学文をつくる技術は確認できない。この種の製品は舶載品さえ日本列島には出土例がない。基本的な技術体系は北部九州に定着したもの、當時もっとも難易度の高い技術は脱落している。

青銅器の組成 朝鮮半島青銅器文化の青銅器群が北部九州に導入され、定着した点に関してもう一点注意しておくべきことがある。青銅器の用い方である。朝鮮半島では、この段階の青銅器は武器=銅剣・銅矛・銅戈、祭祀具=多錫細文鏡・小銅鐸・鈴付青銅器、利器=銅鑿・銅鉗の各種青銅器がセットで有力者の墓に副葬される。北部九州でもこれら青銅器は有力者の墓の副葬品として出土する（図5）が、武器=銅剣・銅矛・銅戈が圧倒的多数を占め、稀に多錫細文鏡や銅鉗が加わるにすぎない。このことは何を意味するのであろうか。私は、当時朝鮮半島由来の最先端技術を駆使して器物を製作はするものの、その青銅器群を用いる有力者とそれを見る一般の社会成員の認識に、大陸との大きな違いがあるのだと思う。簡潔にいうと、朝鮮半島においては青銅の武器・祭器・利器が一括して有力者のもとに保持され、集團構成員に繰り返し誇示されることで保有者の社会的ステータスが担保された。しかし、北部九州ではすでにその基本形が異なつており、武器類を重視し、なおかつやがて北部九州では銅矛が優位に扱われている。また、北部九州に定着し、製作され始めた青銅器群が九州から東方に波及する際（図6）に、中国地方では銅剣が重視され、近畿方面では小銅鐸が重視されて銅鐸として飛躍的な発展を遂げる。しかも、中国・近畿周辺では青銅器の管理に有力者が関わるとしても、青銅器を用いて行われる宗教儀礼は一般的な集團構成

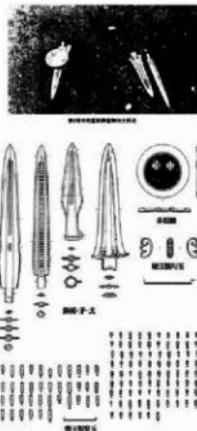


図5 福岡市吉武高木遺跡3号木棺墓の副葬品
（『吉武遺跡群』1996）

員が参画するものとなっている。北部九州から近畿周辺まで広く定着した青銅器群は、その由来を辿れば朝鮮青銅器文化に行きつくが、しかし青銅器の社会的意義が大きく変質している。

朝鮮半島では、弥生時代中期併行段階になると鉄製の利器と武器が普及していく中で、青銅武器・利器類は急速に後退する。一方、北部九州では、鉄製利器・武器類は次第に普及していくものの、武器形青銅器は銅矛を中心に大型化および儀器化が進行し、朝鮮半島型式から大きく逸脱する。いわば倭型式の形成であり、それは製作と流通の中心が九州から中・四国方面に移る銅劍でも同様である。導入時は劍・矛・戈の青銅武器としてセットをなしていたのが北部九州の銅矛・銅戈と中・四国の銅劍に分離する。その過程に併行するように小形で無文の小銅鐸から大型で有文の銅鐸が形成され、その分布も近畿周辺に移る。朝鮮半島系青銅器文化の青銅器群が一部を脱落させて導入され、北部九州に定着したもの、まもなく日本列島（倭国）内の各地域社会の中で分離・個性化する。本来は有力者の武威とともに司祭者であることを示す器物であった青銅器群は、分散・個性化して地域集団の祭器としての道を歩む。青銅器の社会的意義の変質である。

中期後葉に楽浪郡を介して漢王朝との交渉が始まり、多数の前漢鏡が北部九州にもたらされるとどうなるか。前漢鏡は面径20cm以上／15～17cm内外／10cm内外以下の大・中・小型鏡があり、大陸では大型鏡は諸侯クラスの墓葬に副葬されるなど、銅鏡のサイズ別に扱いの差異がある。それが北部九州では、のちの奴国・伊都國の須玖岡本遺跡D地点・三雲南小路遺跡1号甕棺のみが大型鏡を保有する。

最上位の玉壁の扱いは異なるものの、銅鏡は漢王朝内扱いに準じる。しかも外交による入手品であるから製作技術は伴わない。朝鮮半島系青銅器と全く性格が異なることに注意したい。

鉄器とその再加工 かつて鉄器は、漢王朝の楽浪郡設置以後に日本列島にもたらされると考えられていた。しかし、それ以前である弥生時代中期初頭～中葉の鋳造鉄斧が広く西日本各地で発見され、その形態的特徴は戦国代の燕の型式に属す。最古の実例は前期後葉に遡るので、朝鮮青銅器文化第3期に伴う燕系鋳造鉄器が青銅器群とともに弥生社会に導入されたことが分かる。石川県小松市八日市地方遺跡では、鋳造鉄斧を装着する形態の斧柄がまとめて出土しており、青銅利器がほとんど欠落する中で、鉄製利器が思いのほか早く普及する状況が分かっている。

しかし一緒に導入された青銅器と異なって、鉄器の場合は、



図6 青銅器生産の東方展開
(石川「銅鐸は九州で形成された」2022)

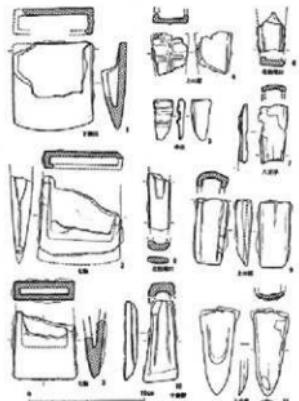


図7 福岡県内出土鋳造鉄器
(野島永「科研報告」2010)

製品はもたらされたものの製作（鋳造）技術は導入されないために、使用して破損した場、高温で鍛打したり鋳造し直したりの再生はできなかった。それゆえ、あたかも磨製石斧が破損した場合のように、鋳造鉄斧の破片を研磨して、より小形の穀類に再加工するほかないかった（図7）。破片となった鋳造鉄斧の多くがこうした研磨による再加工が施してある。金属器が導入されても、弥生社会に技術移転ができたのは青銅器だけであった。

（3）土木・石積み技術

縄文時代には顕著でなく弥生時代になって大陸から導入された技術として、ものづくりのほかに、大地に構造物をつくる技術（土木・石積み）もある。これは、縄文時代からの変化を知る以上に、1000年内外のうちに造成された古代山城の土木技術との違いの大きさを感じるために提示するものである。

環濠集落 土木技術では、集住する集落の居住域の周りに巡らす環濠（と土堀）と、灌漑水田の造成技術を挙げる。環濠施設は、縄文時代でも中期末の北海道に2遺跡の実例があるものの、その性格も由来も不明なので、ここでは略す。弥生時代に新たに導入された環濠集落は、中国の北方（内蒙自治区興隆窪遺跡など）と長江中流域（湖南省八十垱遺跡など）に始まり、朝鮮半島経由で弥生時代開始期に導入されたものである。早期～前期初頭の福岡市那珂遺跡（図8・9）では外径約150m・内径約125mの二重環濠で、断面V字形の外環濠は復元幅6～7m・深さ約4m、断面逆台形の内環濠は復元幅約3.5m・深さ2.5～3mの規模である。環濠内の面積12000m²、環濠が全周すると仮定すると掘削土量は8000m³内外に上る。しかしこれは弥生時代最初期の環濠集落であって、弥生時代中・後期の数十万m²におよぶ大規模環濠の場合は、環濠の規模も大きく、多重環濠も多いことから一桁以上大がかりな土木量になる。



図8 比恵・那珂遺跡
(久住猛雄『弥生時代の考古学』8所収論文,2008)

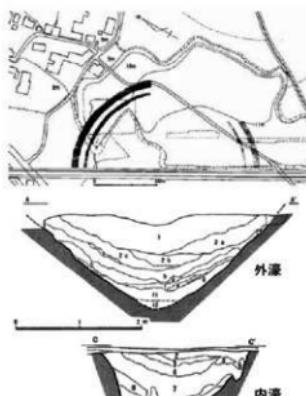


図9 那珂遺跡の二重環濠
(『那珂II』1994)

水田造成・灌漑施設 弥生時代の土木技術は、環濠だけでなく、水田造成や灌漑施設としての井堰も確認しておく必要があろう。近年近畿地方の奈良県御所市の中西・秋津遺跡では弥生時代前期、大阪府八尾市・東大阪市の池島・福万寺遺跡では弥生時代前期から後期までの大規模な水田跡が検出されて注目された。前者では調査区外を含めると水田域は10万m²にも及び、後者では灌漑用水の給水の仕組みが詳しく分かっている。

弥生時代前期の水田跡は数万～十万m²に及ぶと考えられるので、水田造成と合わせると集落の開設にともなう土木量はかなりのものとなる（仮に一集落60名とすると@200m²を超える土量となろう）。環濠集落は中・四国地域では発見例が少なく大規模な例も少ないが、それ以外の地域では関東まで一般的な集落形態である。いまだ鋤・鍬類は刃先に金属を用いない早・前期の段階では、弥生時代後期以後に水田造成が大規模化するとしても鉄製刃先が普及すること比べると、相対的には厳しい労働であったと推定される。

土木技術では、環濠掘削や水田造成の他に、灌漑施設としての井堰の造成にも目配りする必要がある。弥生時代水田に伴って各地で井堰が検出されており、ここでは弥生時代でもっとも堅固な井堰遺構が確認された福岡市比恵遺跡（第131次調査）の事例を示す。比恵遺跡は、弥生時代中期には南隣の那珂遺跡と連続する南北約2km・東西600m内外にもおよぶ著しく大規模な集落で、後期末には中央を南北に貫く道を起点として碁盤目状の街区に編成替えされている。この街区は大陸の城市（城壁都市）の設計原理の影響を想起させるが、比恵・那珂遺跡がのる台地の自然地形に沿う点は城市の原則から外れることは注意しておきたい。ここで注目するのは城市ではなく、井堰遺構である（図10）。井堰は集落北端の東側を北へ向かう流路に設けてあった。下流から上流側に4列が確認され、各列は直径

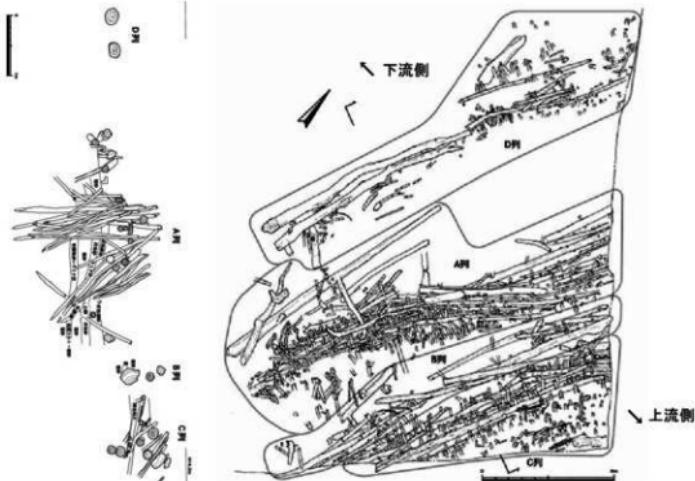


図10 比恵遺跡の井堰（「比恵71」2016）

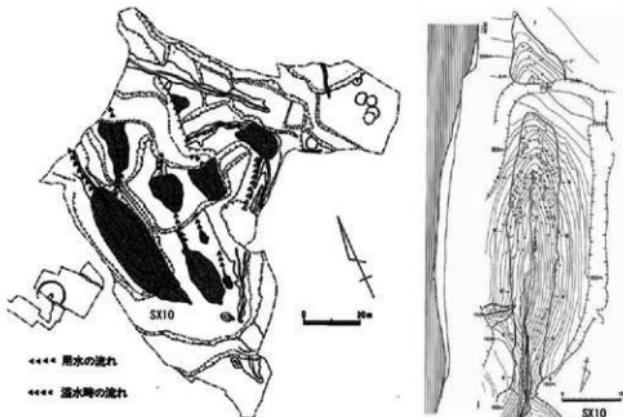


図11 三苦永浦遺跡の溜井遺構（『三苦永浦遺跡』1996）

約15~30cmの横木に添えて上流側に杭を密に打ち込み下流側に支保材をかませた構造を数列組み合わせた堅固な構造で、中期末から後期中頃まで下流から上流へと順次補い追加された状況である。流路の西側を検出しただけなので20~30mほどの幅になると調査者は見ている。井堰の他に、溜井も弥生時代中期には出現している。福岡市三苦永浦遺跡（図11）では、並列する小さな谷地形を利用した溜井が10基確認された。最大例で長さ53m・幅12m・深さ最大4mほどもある。しかし、周辺地形をみると、下流の水田域が河川から用水を確保することが不十分なことから給水するための施設とみられる。

土木技術という点では石積み構造も見てみよう。縄文時代にも環状列石や配石墓など礫石を用いて構造物をつくる例はあるが、立石部を除くと基本的には平面的であって、立体構造は著しく稀である。ところが弥生時代になると石積みによる立体的構造物が出現する。その最古の実例が、弥生時代早期～前期初頭の福岡県宗像市田久松ヶ浦遺跡の木棺石櫛墓群である。塊石を垂直に1m近く積み上げて櫛構造をつくり、木棺を納めたのちに蓋石を架す。有柄式磨製石剣・磨製石鎌（舶載型式）や小形壺を副葬する習俗とともに朝鮮半島の木棺石櫛墓が受容されたものである。福岡平野周辺ではこうした石積み構造はほとんどみられず、むしろ遠賀川以東の中・四国方面に簡略化した類例が広がる。その中で前期の島根県松江市堀部第一遺跡や広島県三次市高平遺跡では埋葬施設よりもむしろ埋葬群の上面を礫石で覆う構造となっている。この構造は中期前半にいたん不明瞭になるが、中期後半から後期になると、ふたたび方形および四隅突出型墳丘墓に現れて墳丘の裾部を覆い、次第に石積みが発達を遂げ、中部瀬戸内の墳丘墓を介して定型的の前方後円墳へと引き継がれる。弥生墳丘墓では墳丘 자체の盛土は顕著でないために裾列石はあっても、石積みは顕著ではない。定型的の前方後円墳が形成される直前のホケノ山古墳の段階で墳丘を構成する重量ある封土を裾で堅固に抑えるために、積石構造が急速な発達を見せる（図12）。それはまた周濠に溜まる水面の波から墳丘を保護する役割をも果た

す。この点でも当時朝鮮半島では存在しなかった構造と言える。箸墓古墳の周濠東南部で検出された土橋部（図13）も簡素ながら裾石を備えて、周濠水の波から土橋を守る役割を果たしている。

3. 古代山城の築造技術の由来は？

考古学・古代史の教員・院生との合同フィールドワークで、福岡・熊本両県にある主だった古代山城を巡査してきた。その際に注意して観察したのは、水門と土壘である。建築物とそれを構築するための基礎造成（地業）は寺院と官衙の瓦葺建築の構築技術体系を用いれば可能である。水門と土壘の石積み法も、それ自体は古墳時代後期の横穴式石室の構築技術との類似点もみられる。しかし、大規模な水門の構築と、水門も取り込んで急峻な谷と山陵を横断する堅固な石積みを伴う土壘は、朝鮮半島の古代山城の技術なくしてはとうてい不可能であろう。その由来を当日お教え願いいたくようお願いしたい。

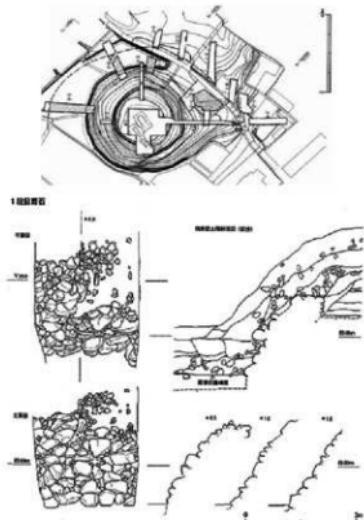


図12 ホケノ山古墳の後円部下段の石積み
（『ホケノ山古墳の研究』2008）

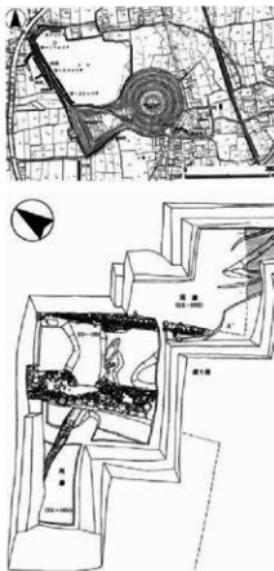


図13 箸墓古墳の土橋
（『桜井市埋文センター発掘調査報告書20』1999）

古代山城にみる渡来系技術

亀田 修一（岡山理科大学特任教授）

1. はじめに

日本列島の古代山城には朝鮮式山城と呼ばれているものと神籠石系山城と呼ばれているものがある。前者は『日本書紀』や『続日本紀』などの記録にみられるもので、後者はその本来の名前は分からぬが、列石を伴う土壘や水門の遺構などから古代の山城と考えられているものである。特に後者に関しては、土壘前面下部の列石が大きな特徴として認識されている。

朝鮮式山城は、齐明天皇6（660）年の百濟滅亡、天智天皇2（663）年の白村江の戦いにおける敗戦、百濟からの多くの人々の亡命・移住、唐・新羅が日本列島へ攻めてくるのではないかという危機感などから築かれたと考えられている（森1998、鈴木2011など）。敗戦の翌年、天智天皇3（664）年に、まず水城（福岡県太宰府市など）が築かれる。翌4（665）年、長門国の城、筑紫国の大野城・桜城が百濟からの亡命貴族（将軍）達率答林春初、達率禮福留・達率四比福夫らによって築かれる。さらに6（667）年、倭国の大安城、讃吉國山田郡の屋嶋城、対馬国の金田城が築かれる。そして文武天皇2（698）年、大宰府に大野・基肄・鞠智の3つの城を整治させている。一方、高安城は大宝元（701）年に廃され、備後茨城・常城城は養老3（719）年に停止されたことが記されている。

このように記録にみられ、所在地がおおよそ確認されている朝鮮式山城が6ヶ所、記録にはみられないが、その遺跡が確認されている神籠石系山城が16ヶ所、合計22ヶ所の古代山城が確認されている。そして、記録はあるが、その所在地などがわかつていないものが5ヶ所あり、これに中国系山城といわれている怡土城を含めると、合計28ヶ所の古代山城があることになる。小稿では怡土城と所在地不明の5ヶ所の山城は外して述べていく⁽¹⁾。

朝鮮式山城は上記のように百濟の亡命貴族（将軍）が指導して築かれたことがわかるが、具体的にどのような「知識や情報や技術」が使用されて神籠石系山城も含めた古代山城が築かれたのか。筆者のこれまで発表してきた論文（亀田1995・2002・2009・2014～2016・2018・2021など）など参考にしながら考古学的な研究成果によって古代山城の「広義の渡来系技術」について見ていくたい。

2. 渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺跡・遺構

（1）選地・周辺遺跡・規模・縄張・高さ・比高差

選地・周辺遺跡 北部九州から瀬戸内海沿岸地域を経て、大和までの範囲内でどのような場所が選ばれたのか（図1）。まず、玄界灘沿岸から有明海北部沿岸までの地域で、大宰府を中心とする地域、朝倉橋広庭宮を中心とする地域などが防衛の拠点であると考えられている。海からの攻撃と、上陸してのちの主要交通路（のちの官道など）沿いの重要な場所に山城が築かれたと考えられている。大宰府の周囲には大野城（入佐・小澤2010、下原2016）・基肆城（田中正弘2016）・阿志岐城跡（小鹿野2016）と水城（杉原2016）および関連土壘などがあり、朝倉橋広庭宮推定地の近くには杷木神籠石⁽²⁾がある。のちの国府などの地域拠点周辺に関しては、高良山神籠石の麓に筑後国府関連遺跡群がある



図1 古代山城の分布

- A. 大野城跡
- B. 基連城跡
- C. 長門城
- D. 金田城跡
- E. 屋嶋城跡
- F. 高安城跡
- G. 駒智城後
- H. 常城
- I. 茨城
- 1. 摺磨城山城跡
- 2. 大廻小廻山城
- 3. 鬼ノ城
- 4. 财岐城山城跡
- 5. 永納山城跡
- 6. 石城山神籠石
- 7. 唐原山城後
- 8. 御所ヶ谷神籠石
- 9. 鹿毛馬神籠石
- 10. 把木神籠石
- 11. 高良山神籠石
- 12. 女山神籠石
- 13. おつぼ山神籠石
- 14. 带隈山神籠石
- 15. 雷山神籠石
- 16. 阿志岐城跡

は備前国府推定地とはかなり離れている。

以上のような選地については、北部九州から大和までの陸路・海路の両方をある程度理解しておけば可能であろう。つまりヤマト王権側のそれなりに築城に関する知識を持つ人物であるならば、古代山城の選地は可能であろう。ただ、当時古代山城に関する知識を有した人物については全くの日本列島の人物もいたかと思うが、その近くには朝鮮半島との往来に関する知識や情報をもつ渡来系の人物がいた可能性はあると思う。一方、百濟からの亡命貴族（將軍）クラスの人物が選地の責任者である場合も、彼らだけで築城の場所を選ぶのはやはり難しいのではないかと考えている。それぞれの地域の地勢情報（眺望・周辺の交通網・水があるのかなど）に詳しい人物、全くの一般の日本列島の人物もいたであろうし、多少なりとも築城に関する情報や知識を持った渡来系の人物などの存在も必要であろう。

つまり、北部九州から大和までの古代山城の選地に関しては、朝鮮半島での城作りに慣れた人物はやはり必要であり、地元の日本列島人や渡来系の人々の協力も必要であったと考えている。

縄張・高さ・比高差 縄張に関しては、7世紀以前に朝鮮半島の山城に類するものは基本的に日本列島には存在しない。弥生時代の環濠集落や高地性集落、古墳時代の豪族居館などの中に朝鮮半島の古代山城と類似するものがないわけではないが、弥生時代のものは時間的に間があきすぎであり、古墳時代のものは規模的にも小さい。朝鮮式山城のように城周2、3kmに及んで山の頂部付近を城壁がめぐる形態のものは古代山城築城以前の日本列島にはやはりないといえよう。ちなみ

が、そのほかの朝鮮式山城・神籠石系山城の近くにはよくわからない。

次にこの北部九州から河内・大和までであるが、瀬戸内海沿岸の各國に1、2ヵ所ずつ築かれている。国府関連遺跡との関係が比較的推測しやすい例は備中鬼ノ城（総社市2005・2006、

岡山県2006・2013、平井2016）と伊予永納山城跡（西条市2016）、そして

讃岐城山城跡（古代山城研究会1996）くらいで、そのほかは交通の要衝にはあるが、特定の拠点との関わりはあまり明確ではないようである。たとえば、備前大廻小廻山城（岡山市1989）

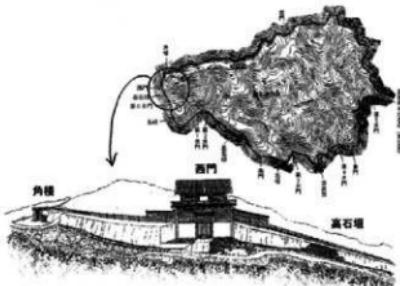


図2 備中鬼ノ城全体図と西門付近イメージ図

に、のちの日本列島の中世山城は尾根線上をおもに利用して郭（平坦面）を作っており、基本的に異なる。

古代山城については、その山のどの部分に城壁をめぐらすのかなどによって鉢巻式、包谷式などに分類されているが、実際には山の形などによって多様である。また標高の高低差も、最低所がほとんど平地に接する肥前おつぼ山神籠石、筑前鹿毛馬神籠石、豊前唐原山城跡（大平村2003・2005）などから、最低所と平地との比高差が200m以上ある筑前雷山神籠石、周防石城山神籠石、讃岐城山城跡、讃岐屋嶋城跡（高松市2016、渡邊2016）など多様である。筑前大野城跡や肥前基難城跡は平地との比高差は130~140mであり、肥後鞠智城跡（熊本県2012、矢野2016）は約30mとかなり近い。また崖の上に築かれた印象がある対馬金田城跡（田中淳也2016）も西から北側は比高差が100m以上あるが、東側、特に二ノ城戸付近では海との比高差は22mほどしかなく、海までの距離も100m弱である。ちなみに備中鬼ノ城の比高差は約250mである。

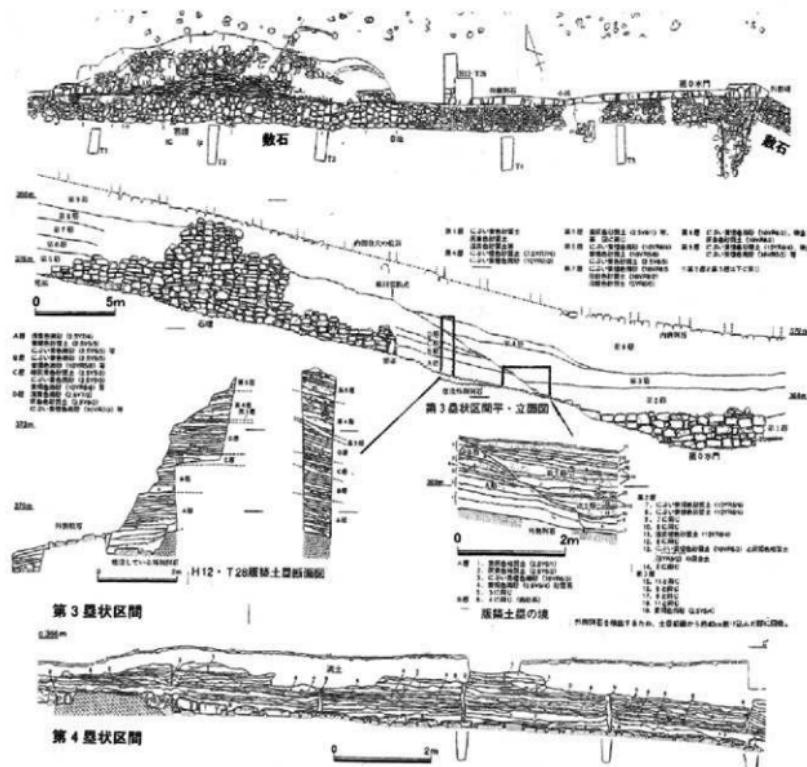


図3 備中鬼ノ城第3・4段状区間の土塁・石垣

このように平地との比高差は、朝鮮半島の山城も同様であり、百濟からの亡命貴族たちが直接・間接的に築城に関与した可能性は高く、日本列島の古代山城の選地や規模などについては渡来系の知識・情報・技術が活用されたものと考えている。ちなみに、日本列島の古代山城の規模に関しても城周がおよそ2、3kmであることも、百济における地域拠点の城の規模を反映していると思われる（図4、亀田1995）。

（2）外郭構造

①城壁

土と石 朝鮮半島の古代山城に関しては、そぞり立つ石の城壁がよく紹介され、一般的に石の城がほとんどのようなイメージがあるが、少なくとも百济の中心域である忠清南道では土城と石城の数は半々であり、王都が置かれた公州

や扶余地域では約7割が土城である（亀田1995）。つまり日本列島に山城を伝えた百济地域の山城は少なくとも土城がそれなりの数は存在するのである。

西日本の古代山城に関しては、石城は対馬金田城跡のみで、よく石垣の写真が紹介される備中鬼ノ城もほとんどは土で築かれている（図3）。また讃岐屋嶋城跡に関しても、確認されている門跡付近の城壁は石で築かれているが、そのほかの部分に関しては、切り立った崖をそのまま使用した可能性も推測され、その上に土塁が築かれている可能性も無視できないのである。このように西日本の朝鮮式山城・神籠石系山城は基本的に土で築かれた土城で、谷部などに石垣が使用されたと考えられる。

そのような意味で対馬金田城跡は特異である。金田城が築かれた場所が基本的に岩山であるという地理的な条件にもよるのであるが、少なくとも当時の日本列島において約3mを超える石垣（石築城壁）を築く技術はなく、やはり渡来系の人たちによる指導・実際の施工がなければ難しかったと考えられる（田中淳也2016、亀田2012）。また、備中鬼ノ城も基本は土塁であるが、西門跡南東側の高石垣は5mを超え、少なくとも渡来系の技術者たちの指導がなければ難しかったのではないであろうか（図3、亀田2021）。

版築 土の城壁は一般的に版築土塁で築かれている。「版築」は新村出編2013『広辞苑 第6版』岩波書店では、「板でわくを作り、土をその中に盛り、一層ずつ柱で突き固めるもの」とあり、日本列島では、古代寺院の基壇構築に使用され始めたと考えられている。一部、古墳の中に「版築状」や「層状」積み土と呼んでその関連も推測されているが、ひとまず588年に造営が開始された大和飛鳥寺が最古の版築の使用と考えられている。

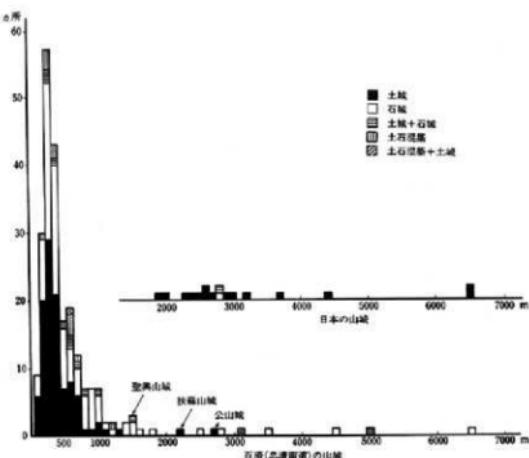


図4 百济と日本の山城の大きさと数

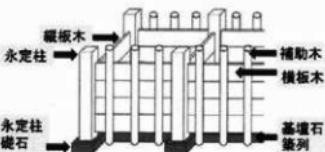


図5 仁川市江華島玉林里遺跡
江華中城（1250年）土墨と模式図

そういう意味では、古代山城の「版築」については、飛鳥寺など古代寺院に使用され始めた「版築」が古代山城にも使用されたとも考えられるが、百濟からの亡命貴族（将軍）・工兵部隊の責任者クラスの人物などが665年の大野城などの山城築城時に独自に指導して、この版築技術を地元の人々に指導して作らせた可能性も十分考えられる。ちなみに大野城が築かれた筑前地域の665年以前創建の古代寺院は明確ではなく、筑後上岩田遺跡土壇がその可能性があるくらいで、九州全域でも確実に665年以前築造と推測できる古代寺院はよくわかっていない。

つまり、水城・大野城・基肄城などの版築土墨構築には北部九州の古代寺院の版築技術が使用された可能性は当然あるが、百濟系亡命貴族（将軍）・工兵部隊の責任者クラスの人物などが地元の人々を使って、彼らの技術とともに新たな版築技術を教えて築いた可能性が高そうである。

敷粗染工法 敷粗染工法は中国漢代の池の堤などに使用され、おもに水気のあるところの土手（堤・土墨）などに使用される工法で（大阪府立狭山池博物館2021）、日本列島では岡山県倉敷市上東遺跡の弥生時代後期の港関連の堤で確認され、少なくとも弥生時代から存在していたことがわかっている（岡山県2001）。

ただ、この工法は日本列島には定着しなかったようで、7世紀半ばの奈良県山田道遺跡（小田ほか2008）で確認され、そして7世紀後半の福岡県水城跡（大堤）（図6-2、九州歴史資料館2009）で見ることができる。大土居水城跡の土墨の下層（春日市2000など）でもその可能性のあるものが見つかっている。

朝鮮半島での敷粗染工法については、城関係ではソウル風納土城の城壁（4～5世紀）（国立文化財研究所2002）で検出され、扶余羅城（6世紀）においても検出されている。扶余羅城では、前述の陵山里寺跡南側の羅城東門跡の南側で検出されている（図6-1、国立扶余博物館2003）。使用される場所はやはり水気のあるところで、中国・日本列島での使用例と同じで、大宰府水城大堤はまさに扶余羅城の敷粗染工法とつながるものではないかと推測している。

列石 神籠石系山城の土墨基礎部には基本的に切石や割石の列石を並



図6 百濟と日本の敷粗染工法
1.扶余羅城南側土墨前面敷粗染 2.太宰府市水城跡敷粗染

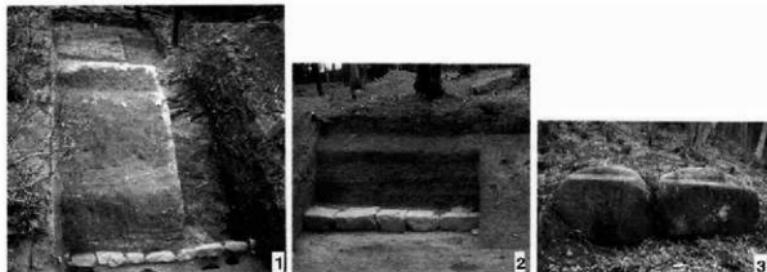


図7 百濟と日本の土塁と列石
1.益山市益山猪土城 2.備前大巡回小巡回山城 3.豊前唐原山城

べ、この列石が朝鮮式山城との区分の大きな目安となり、切石の列石が北部九州の「神籠石」を象徴している（図7-2・3）。そして瀬戸内海沿岸地域の神籠石系山城では一部周防石城山神籠石に切石加工した石材が使用されているが、基本的に割石・一部自然石で、九州と瀬戸内の神籠石系山城の違いを示している。また、北部九州の切石列石には硬い花崗岩が使用されてものが比較的多く、これも特徴の一つとなっている。

一方、朝鮮式山城ではこのような切石・割石の列石はないと考えられていたが、調査が進む中で、比較的小型の割石や自然石を基礎部に並べた土塁が筑前大野城跡や肥後鞠智城跡で検出され、朝鮮式山城と神籠石系山城の近さが認識されるようになった。特に對馬金田城跡のビングシ門跡付近の土塁の基礎部でごく小範囲であるが、備中鬼ノ城の列石と類似した大きめの石材が確認された。この石材をどのように理解するのか、今後の調査に期待したい。

ただ、このような土塁基礎部の切石列石は朝鮮半島では明確に確認されておらず、北部九州の古墳の花崗岩加工技術が使用されたのではないかと考えられている。割石列石を土塁基礎部に設置した割石列石土塁もその例がほとんど知られておらず、この関連がよくわからていなかった。しかし、百濟時代のものと推測される全羅北道益山猪土城で割石列石土塁は確認されている（図7-1、亀田2016b、金善基・趙相美2001）。切石列石土塁は今後の検討課題であるが、花崗岩の切石加工技術は6世紀末～7世紀初め頃に百濟から飛鳥地域や西日本各地に伝えられたようであり、その技術が西日本の古代山城



図8 高句麗と日本の逆し字形段加工石材
1.集安將軍塚古墳1号陪塚 2.豊前唐原山城跡第1水門跡(北より) 3.豊前唐原山城跡第1水門跡(西より)



図9 高句麗古墳と日本古代山城の算木積
1.集安西大塚古墳南東隅角部 2.讃岐城山城跡城門北側石積み(西より) 3.讃岐城山城跡城門(西より)

に使用された可能性はある。現時点では、西日本の7世紀中頃以前の花崗岩切石礎石の加工技術が古代山城の切石列石などに使用された可能性と、新たに7世紀中頃に入ってきた花崗岩加工技術が古代山城の列石などに使用された両方の可能性がありそうである（亀田2001）。

列石・石垣の石材加工と石積み 上記のように九州の神籠石系山城の列石は基本的にきれいに加工されており、いわゆる切石になっている。特に上面面を鍵形（L字形）に加工するものが比較的見られる。この上面鍵形加工は、本来この加工面まで土壘を削り出すためのものと推測される。

九州の列石石材は、上面鍵形加工のほかは基本的に正面を方形に加工しているが、豊前唐原山城跡（大平村教育委員会2003・2005）には逆に上部前面側を少し高くして、後側を低くした逆L字形のものがある。このような加工は筑前阿志岐城跡で類似したものが見られるだけである。豊前唐原山城跡や筑前阿志岐城跡の上面面を一段高く加工して石材を積み上げる方法は日本列島の古代山城では基本的に見ることができず、高句麗の古墳や山城の石積みにおいて見ることができ、高句麗の石材加工技術とつながる可能性がある。さらに筑前阿志岐城跡ではこのような加工がない石材に関しても積み上げるときに前面を少し下げて階段状に積んだ部分がある。このように上の石を少し後ろに下げることに意味があれば、やはりこれも高句麗の石材の積み方に繋がるのかもしれない（図8）。

また、日本列島の中世から近世の城の石垣の石組みにおいて、隅角に「算木積」と呼ばれる積み方がある。この中近世の「算木積」の起源についてはよくわかっていないが、讃岐城山城跡の城門跡で見ることができる（図9-2・3）。この城門跡については、「算木積」で積まれているため新しく積まれたのではないかという意見もある。しかし、筆者は以前中国集安に行く機会があり、図9-1のような「算木積」で築かれた西大塚古墳（積石塚）を見学した。この古墳は4世紀代のものと考えられており、隅角には積み直しは確認できなかった。つまり高句麗と讃岐の「算木積」については4世紀



図10 百濟・新羅と日本の土壘前面石敷き
1.忠清北道櫻山蛇山城 2.備中鬼ノ城

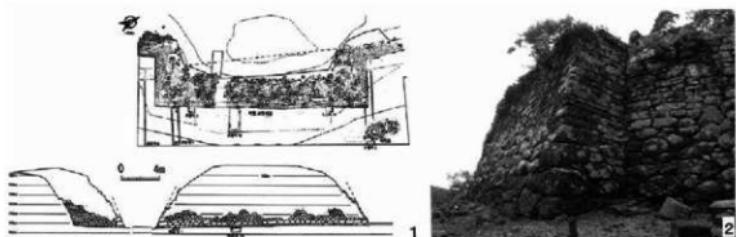


図11 百濟と日本の雉城
1 忠清南道扶余羅城東羅城雉城 2 対馬金田城跡雉城

と7世紀という時間的な差があり、これらをどのように説明することができるのか、現時点ではわからないが、少なくともそれぞれが「算木積」であることは間違いないと思われ、宿題としておきたい。

敷石 例は極めて少ないが、備中鬼ノ城の土壘の内外掘部で敷石が確認されている。外面の敷石の場合、土壘前面の柱は切断されるなどしてその上に石が敷かれたことになる。ほかに土壘の外側の敷石は筑前大野城跡小石垣地区でのみ検出されている。朝鮮半島では忠清北道稷山蛇山城跡などで検出されている（図10-1）。ただ、朝鮮半島でも例は少いようである。

雉（雉城） 雉（雉城）は城壁の外面に上から見て、方形または半円形に突出させた構築物で、敵が城壁に迫ってきたときに、側面からも攻撃できる極めて有効な防御施設である。形態、地域によって雉城、曲城、馬面などとも呼ばれている。この雉が角を持つ城のコーナー部分に設けられ、その上に建物が建てられている場合、「角楼」と呼ばれている。

日本列島ではこの雉に関しては、古くから対馬金田城跡の一ノ城戸（図11-2）が注目されていたが、後世の作り直しではないかとの意見もあった。しかし、備中鬼ノ城（図12-1）の調査で初めて古代山城に伴うものが確認され、対馬金田城跡のものも上部は改変されているが、基礎部は当時のものと考えられるようになった。さらに讃岐屋嶋城跡の浦生石壘横の突出部もその可能性が検討され（高松市2016）、筑前大野城跡にもありそうであると考えられている。

このような雉に関しては、中国・朝鮮半島に類例があるのであるが、車勇杰氏によれば、百濟地域の雉は横長型で、備中鬼ノ城や対馬金田城跡のものは百濟型と考えられるとのことである（車勇杰氏のご教示による）。

ちなみに、百濟最後の扶余羅城の東側城壁線には2ヵ所の雉が検出されている。北羅城雉城は長さ13.1m、奥行1.1～1.4m、高さ約10m？（扶余郡文化財保存センター2013a・b）、東羅城雉城は長さ22.4m、奥行5.3m、高さ約5～6m（図11-1、百濟古都文化財団2018）である。ともに横長型であり、備中鬼ノ城や対馬金田城跡の雉は車勇杰氏のご教示通り百濟型でよさそうである。

また、備中鬼ノ城の角楼は正面から見て城壁（石垣と土壘）の間に柱の痕跡が確認できる（図12-1）。このような石垣・土壘構築法は、日本列島の古代山城では基本的に見ることができないが、高句麗平壤大城山城や百济地域の大田月坪洞遺跡（図12-2・3）など高句麗と関わると考えられる山城でみることができる。

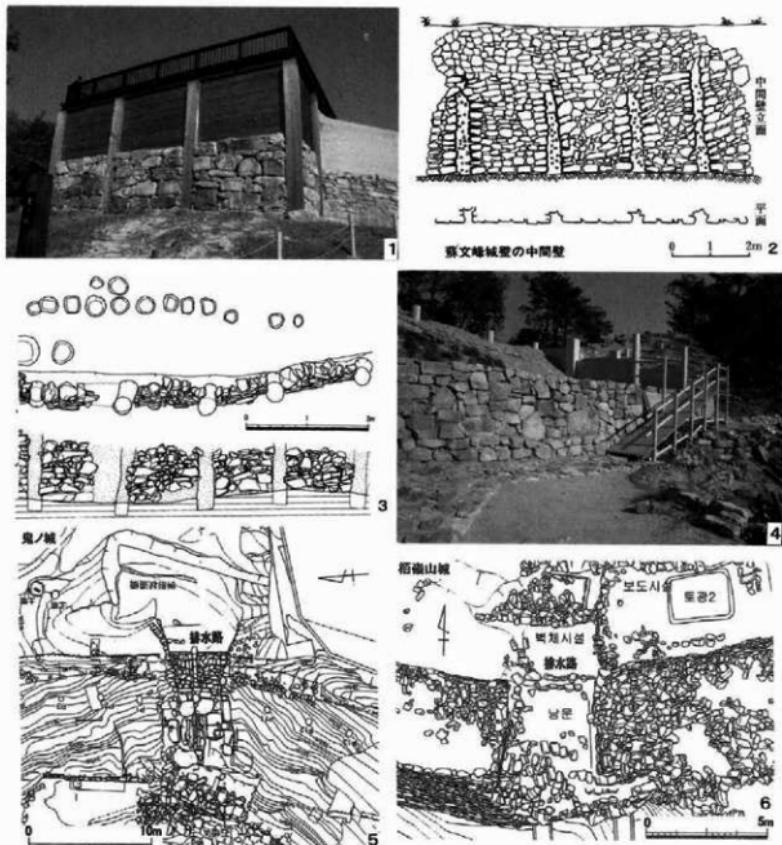


図12 朝鮮半島と日本列島の城壁内の柱痕跡・懸門・妻城
1.備中鬼ノ城角楼 2.平塙大城山城跡蘇文峰 3.忠清南道大田月坪洞遺跡
4・5.備中鬼ノ城北門跡 6.忠清南道梧嶺山城跡南門城

②門

平門と懸門 古代山城の門は基本的に城外から城内へ多少の傾斜はあるにしてもそのまま入る「平門」と考えられていた。しかし、讃岐屋嶋城跡において門に段差がありそうであることが確認され、備中鬼ノ城の発掘調査においても段差のある門跡が確認され（図12-4・5）、朝鮮半島の山城の「懸門」ではないかと注目されるようになった（車勇杰2016）。そしてこのような視点から各地の山城の調査が進められ、現時点では上記2ヶ所のほか、対馬金田城跡、筑前大野城跡でも懸門が確認されている。ちなみに城外面と門床面の高さの差は、讃岐屋嶋城跡城門跡は約2.5m、備中鬼ノ城北門跡は約

1.6m、対馬金田城跡三ノ城戸は約1.6m、筑前大野城跡北石垣城門跡は約1.4mである。

朝鮮半島の懸門を整理した向井一雄（2016）は、懸門の高さ（城門前面石垣高）に注目して、3mを超えるものが多い新羅から、1.5m程度が多い百濟を経て、日本列島の古代山城の懸門へという伝播ルートを想定している。

門の平面的特徴：甕城・枡形 甕城、枡形のような平面構造を持つ門跡は讃岐屋嶋城跡、備中鬼ノ城北門跡（図12-5）などで確認されている。どちらも懸門で、城内に入ったあと、まっすぐ進むことができず、一度左に曲がってしか入れないようになっている。このような構造の門は百濟の錦山柏嶺山城南門跡（姜鍾元ほか2007）に見ることができる（図12-6）。

讃岐屋嶋城跡や備中鬼ノ城のような全面的な調査を経たものではないが、筑前大野城跡の懸門である北石垣城門跡もその地形を見ると、同様の構造になっていると思われる。また、筑前大野城跡の太宰府口城門跡の場合は、門内を通過したのち同じように直進できないように掘立柱の板塀のようなものが作られていたことがわかっている。このような板塀などによる遮蔽装置は備中鬼ノ城西門跡にも見られ、同南門跡も門を通過して石段を登ると前面に土と石の壁があり、直進はできないようになっている。

敷石・排水溝 対馬金田城跡、備中鬼ノ城、讃岐屋嶋城跡と大野城跡観世音寺城門跡の床面には敷石があり、対馬金田城跡と讃岐屋嶋城跡ではそれらが階段をなすこと、また備中鬼ノ城北門跡（図12-5）と讃岐屋嶋城跡ではその下部に排水溝があることも確認されている。

朝鮮半島では石敷きの門としては、高句麗平壤城内城平壤神社門跡、新羅明活山城北門跡、百濟錦山柏嶺山城南門跡（図12-6）など朝鮮半島三国に見られるが、百濟では柏嶺山城以外はよくわかっていない（向井2016）。

門礎石：唐居敷・礎石 城門に関する重要な遺物が門礎石である。掘立柱の柱を添える唐居敷と上に柱をのせる礎石がある（図21-1、向井1999）。前者は筑前大野城跡、筑前水城跡、肥前基陣城跡、肥後鞠智城跡、周防石城山神籠石、備中鬼ノ城、播磨城山城跡、讃岐城山城跡で確認され、九州のものは円形の柱が添えられるように丸く削り込まれており、瀬戸内海沿岸地域のものは基本的に方形の柱が添えられるように方形に削り込まれている。ただ、備中鬼ノ城の東門跡の唐居敷は円形に削り込まれている。また周防石城山神籠石と播磨城山城跡、讃岐城山城跡には方形の削り込みと方立、蹴放の段差などは作られているが、軸摺穴がないものがあり、讃岐城山城跡では柱を添えるための方形の削り込みが貫通していないものもある。少なくとも讃岐城山城跡には未完成の唐居敷が存在し、未完成の

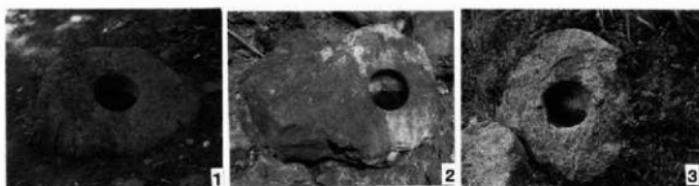


図13 朝鮮半島と日本列島の円孔礎石
1.吉林省龍潭山城跡 2.対馬金田城跡二ノ城戸 3.飛鳥酒船石遺跡

門があったものと推測される。周防石城山神籠石と播磨城山城跡の唐居敷に関してはこれで完成形の可能性もあるが、未完成品である可能性もある。また、讃岐屋嶋城跡では立派な石組みの門跡が確認され、一部柱穴跡が検出されているが、石製の唐居敷は検出されていない。流出してしまった可能性と木製唐居敷の可能性が推測されている。

一方、柱を石の上に載せる礎石は、対馬金田城跡（図13-2）、筑前大野城跡で確認され、播磨城山城跡と大和酒船石遺跡（図13-3）にもその可能性のあるものがある。筑前大野城跡太宰府口城門跡の礎石は唐居敷使用門の改修時に使用されており、8世紀前半のものと考えられている。播磨城山城跡のものはよくわからない。大和酒船石遺跡のものはもし酒船石遺跡の石垣・土壘に伴うものであるならば、7世紀中頃まで遡ることになる。対馬金田城跡の礎石に関しては、石壘の城門に伴うものと城内土壘のビングシ門跡に伴うものすべてが同じグループのもので、城内土壘が外周の石壘と同じ時期のものか、それとも遡るのかによって使用時期に幅が出てくる。少なくとも現時点まで対馬金田城跡では8世紀に入る土器などは出土しておらず、ビングシ門跡礎石が遡るならば、筑前大野城跡の礎石建物の門よりも古い段階に礎石建物の門が建てられていたことになる。

朝鮮半島では、いずれ発見されるものと思っているが、掘立柱を添える石製の唐居敷はこれまで確認されていない。木製の唐居敷がおもに使用されていたのであろうか。讃岐屋嶋城跡の城門跡では掘立柱の柱穴は検出されているが、石製唐居敷は検出されていない。朝鮮半島で推測されている木製唐居敷を使用していたのであろうか。

また、酒船石遺跡の円形の孔のみをあけたものの類例は朝鮮半島では、高句麗吉林省龍潭山城で実見したことがある（図13-1）。

門の建物：掘立柱建物・礎石建物 今述べた唐居敷と礎石を使用した門のほかに、唐居敷を使用しない掘立柱建物の門が肥前おつぼ山神籠石東門跡などで想定されている。ただ柱穴が大きくなり、門部分の城壁構築用の柱穴という考え方、門の柱と工事用支柱を兼ねたものという考え方もある（山口2003註19）。

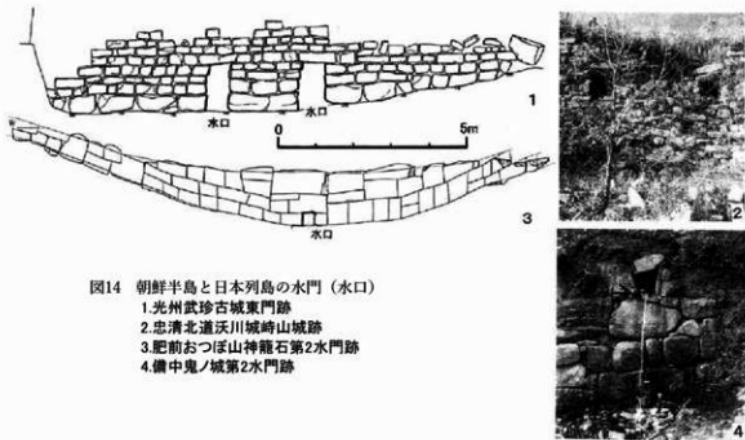


図14 朝鮮半島と日本列島の水門（水口）

- 1.光州武珍古城東門跡
- 2.忠清北道沃川城崎山城跡
- 3.肥前おつぼ山神籠石第2水門跡
- 4.備中鬼ノ城第2水門跡

この肥前おつぼ山神籠石以外には神籠石系山城で上記の唐居敷関連のものを除くと明確な門跡は確認されていない。

水門 城内の水は基本的に谷部に排水溝を作り流出させている。通水施設を持たず、そのまま石壙・石垣の間を自然に流れ出るようにしたものも備中鬼ノ城などで確認されているが、西日本の古代山城では一般的に、土壙や石壙の下部に排水溝を作ったいわゆる「水門（水口）」がある。その通水口の数は一つの石壙に1ヶ所の例が多いが、2、3ヶ所のものもあり、横に、上下に、また斜めに並ぶものも見られる（図14）。

この排水溝の床面は、一般的には城壁の最下部、地山面をそのまま利用するものがほとんどで、単独の排水溝が地山面から少し高い石壙や土壙内に確認されるものが筑前大野城跡、豊前御所ヶ谷神籠石、備中鬼ノ城などで確認されている。豊前御所ヶ谷神籠石では現在の外面の床面から数十cmのところに底石を少し突出させ、その側面に側石を立てて丈夫な排水溝を作っている。備中鬼ノ城では石壙の上面に排水溝を作り、その上に土壙を載せている（図14-4）。このような排水溝の高さが何らかの意味を持つのかよくわからないが、百濟地域には地山を床面に利用するものが比較的多く見られる。

（3）内部施設

①八角形建物

古代山城においては、掘立柱建物跡と礎石建物跡が検出され、管理棟、倉庫、兵舎、作業小屋、祭祀関連建物などの用途が推測されている。これらの掘立柱建物と礎石建物は一般的に平面形が長方形をなしており、古代山城築城以前の宮殿や一般の建物との区別はできない。その中にあって注目されるものが肥後鞠智城跡の八角形建物跡である（図17）。2棟確認されている。どちらも掘立柱建物がま

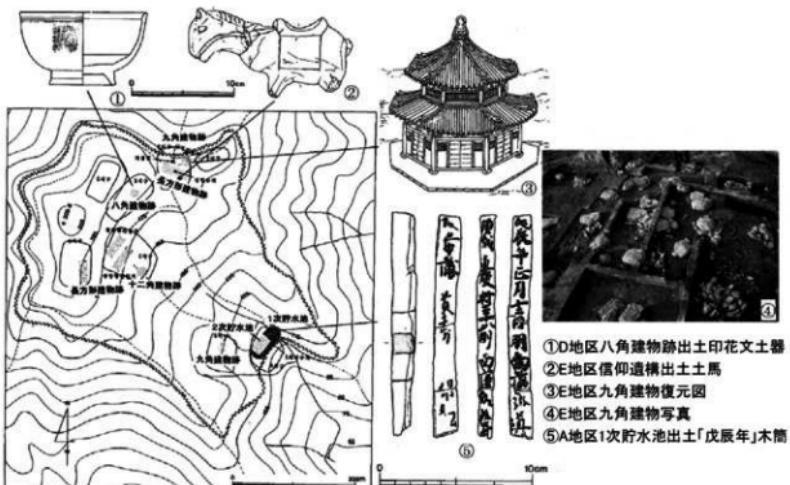


図15 京畿道河南二型山城（1/8,000）と出土遺物ほか

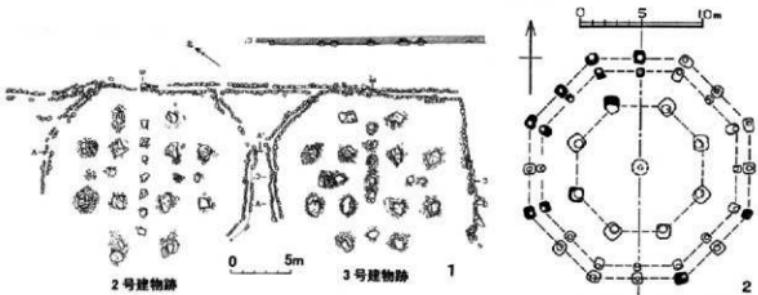


図16 高句麗集安丸都山城八角形建物（1）と撰津前期難波宮西八角形建物（2）(1/400)

ず建てられ、のちに掘立柱建物または礎石建物に建て替えられている。柱の配置は中央に心柱に該当する柱穴があり、そこから南側建物跡（32・33号建物）は柱列が3重に、北側建物跡（30・31号建物）は2重に、そして、放射状に配されている。時期は7世紀後半で、素弁八葉蓮華文軒丸瓦が関連する丸瓦・平瓦とともに葺かれていたと考えられている（熊本県2012）。

日本列島の八角形建物は古代寺院では、大和法隆寺東院夢殿と大和栄山寺八角堂が現存し、大和興福寺北円堂の前身の円堂院などが記録で確認できるが、いずれも8世紀のものである（向井2014）。また八角形の塔としては、山背櫻原廃寺の塔が発掘調査で八角形であることが確認され、大和西大寺（8世紀）

の塔も記録と遺構で八角形であることが確認されている。これらのなかで最も遡る可能性があるものが山背櫻原廃寺の八角塔跡である。細かな創建時期は分からぬが、寺は7世紀中頃の創建と考えられ、塔もその時期の可能性がある（亀田2002b, p.446）。そうすると、現時点では肥後鞠智城跡の八角形建物とほぼ同時期の日本列島最古段階の八角塔となりそうである。軒丸瓦の文様は高句麗新羅系のものである。軒平瓦は無文軒平瓦で、顎面に軒丸瓦と同じ文様を押した顎面施文軒平瓦で、顎面施文軒平瓦としては、最古段階のものと推測される。

八角形の塔の系譜については、一般的に平壤清岩里寺跡（5世紀）など高句麗寺院の塔につながると考えられている（田中2014）。高句麗の2番目の都とされている中国吉林省集安の丸都山城の城内にも八角形建物跡が2棟ある。時期ははっきりしないが、周辺で出土している瓦は6世紀後半～7世紀のものである。ただ、柱の配置は心柱を中心とした放射状配置ではなく、井桁状配置をしている（図16-1、吉林省・集安市2004）。

櫻原廃寺の八角塔は寺院建物や伽藍配置研究などによれば、今述べたように高句麗寺院との関係を考えるのが一般的である。ただ、基壇は瓦積基壇で、これは百濟との関わりが推測され、また、この地域は渡来系氏族の秦氏が力を持っていた地域である。

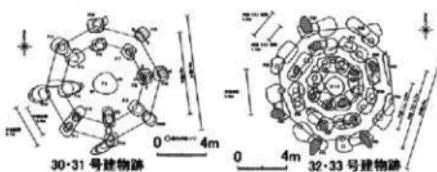


図17 肥後鞠智城跡の八角形建物跡 (1/400)

一方、古代寺院以外では、摂津前期難波宮の東西の八角形建物跡（図16-2）が7世紀中頃まで遡る最古の八角形建物跡と考えられている（積山2014）。柱配置は3重の柱列が同心円状に配されている。ただ、近年この八角形建物は天武天皇代のものではないかという意見も出されている（泉2018、湊2022）。地方では上野三軒屋遺跡に掘立柱建物（のちに礎石建物）の八角形建物跡がある。この遺跡は上野国佐位郡正倉跡として国の史跡に指定されている。7世紀後半に造営され、9世紀後半まで維持されたようである。平安時代の1030年頃に作成された「上野國交替實錄帳」の佐位郡正倉の項に記された「八面甲倉」がこの八角形建物跡に該当すると考えられており、倉庫と考えられている。建物の柱の配置は、井桁状に配され、高句麗集安丸都山城の八角形建物跡と同じ柱配置で、鞠智城跡の八角形建物跡のような放射状配置ではない。

それでは、肥後鞠智城跡の八角形建物のルーツはどこか。筆者は現時点では韓国京畿道二聖山城の八・九角形礎石建物（図15、7世紀後半～8世紀：金秉模・沈光注1988、漢陽大学校博物館2006）や忠清南道公山城の十二角形礎石建物など古新羅・統一新羅の多角形建物がそのルーツの可能性を考えている。

②貯水施設

貯水施設構造は、肥後鞠智城跡、備中鬼ノ城、豊前御所ヶ谷神籠石、讃岐屋嶋城跡、そして筑前大野城跡などで確認されている。籠城するには当然無くてはならない施設である。肥後鞠智城跡の貯水施設では堤防状遺構と岩盤掘削堰堤が検出され、備中鬼ノ城の貯水施設では土手状遺構が調査され（図18-2）、貯水機能とともに城壁の破損防止のために使用された可能性が考えられている。この2ヵ所のほかに、豊前御所ヶ谷神籠石の貯水施設推定地は未調査であるが、その可能性は高い。讃岐屋嶋城跡の貯水施設に関しては、一部が発掘調査されただけで、詳細は不明であるが、地形的には堤防状（土手状）遺構を持つ貯水施設がいくつかつながって築かれていたものと推測される。さらに筑前大野城跡では鏡ヶ池と呼ばれる場所があり、現在も水がたまっている。

日本列島の古代山城の貯水施設は大野城跡の鏡が池のようなため池状のものとそのほかの例のような谷部の低いところに堤防状のものを構築し、水を溜める構造のものがある。堤防状施設については、鞠智城跡例のように土で積み上げたり、削り出して築いたものと、備中鬼ノ城のもののようにそれに石を貼ったものがある。堤防状遺構の奥側（池の両側）は自然の土の斜面がそのまま使用されている。鬼ノ城の土手状遺構は2ヵ所調査されたが、城内の地形をみると、ほかにも同様のものはあるようで、さらに第1水門貯水池と呼んでいるものはやや小型で土手状遺構はないようである。大野城跡の鏡が池のグループのようである。

朝鮮半島の山城で確認されている貯水施設は方形や円形、橢円形などの形で、石組によって壁を構



図18 朝鮮半島と日本列島の貯水施設
1.大田鶏足山城跡
2.備中鬼ノ城土手状遺構!

築している（図18-1、全赫基2022）。日本列島の山城の貯水施設のような自然の土壁を利用した例は分かっておらず、今後類例が発見されるものと思うが、現時点では朝鮮半島のどの地域の貯水施設の影響を受けて日本列島の貯水施設が出来上がったのかはよくわからっていない。

3. 渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺物

古代山城出土遺物には土器、瓦、土製品、鉄製品、青銅製品、木製品など多様なものがあるが、7世紀段階の古代山城築城時に新たな渡来系技術を使用して作られたものとして、区別しやすいものは瓦である。門の扉に使用された軸挽金具も新たに朝鮮半島からもたらされた技術による可能性がある。

瓦 古代山城において瓦がまとまって出土している城跡は、筑前大野城跡（665年築城、698年繕治）、肥前基肄城跡（665年築城、698年繕治）、肥後鞠智城跡（698年繕治）である。ただ、その初期段階のものは、665年頃の築城時のものか、それとも698年の繕治工事段階に使用されたものか、明確な識別はできない。そしてそれが、それ以前のその地域にあったものか、畿内などから伝えられたものか、朝鮮半島からの新たな情報や技術によって作られたのか厳密な区別は難しい。

7世紀末以前のこれらの瓦については小田富士雄が古くから検討している（小田1977a・b、2013、2016など）。図19が、小田（2016）が政庁Ⅰ期とした瓦で、大野城、基肄城、鞠智城などで出土した単弁（素弁）蓮華文軒丸瓦である。栗原和彦（2000）の分類をもとに、蓮弁の文様から大きく鏡弁グループ（030・032・033）とかえり弁グループ（020A・020Ba）に分け、Ⅰ類（大野城主城原033型式・基肄城Ⅰ式）：①段階：665～670年、Ⅱ類（大野城主城原020A型式）・Ⅲ類（020Ba型式）・Ⅳ類（032

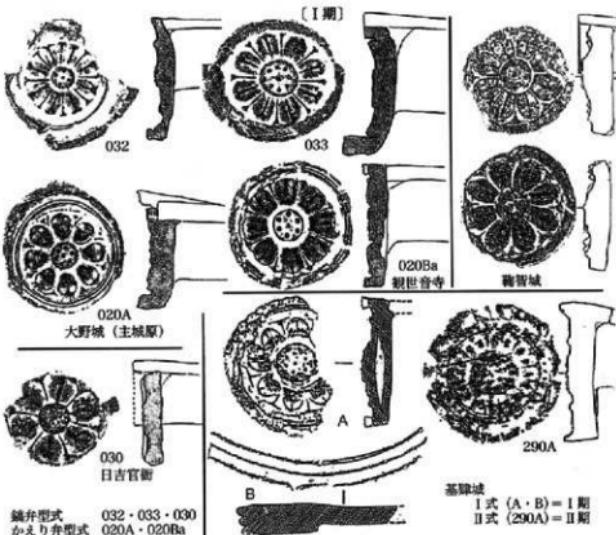


図19 北部九州古代山城出土瓦の小田富士雄分類

型式) : ②段階: 670~689年 (~③段階: 689~700年頃) としている。このうちⅢ類は觀世音寺などの寺院においても使用され、8世紀代まで使用されている。同様に基跡城Ⅰ式の系譜の軒丸瓦は豊前地方で8世紀前半まで使用されている。

これらの小田政庁Ⅰ期の軒丸瓦の系譜であるが、かえり弁軒丸瓦(020A・020Ba)については、古くから小田は「百濟系单弁軒丸瓦」と呼び、大和坂田寺經由の百濟系軒丸瓦としている(小田1977a・b)。鎬弁軒丸瓦(030・032・033)については、大和高麗寺関連の瓦を經由した高句麗百濟系としている(小田2013)。

つまり、いずれのグループの瓦も畿内を經由した百濟系と高句麗百濟系とされている。そして、鞠智城跡の創建年代について、対馬金田城築城と同時期の第2次防衛構想に入っていたが、なぜか667年11月条の記載から漏れ、軒丸瓦についても大野城の鎬弁瓦(033)を直接の祖型として作られたと考えている(小田2016、p.194・196)。

以上のように、小田は北部九州の筑前大野城と肥前基跡城と肥後鞠智城の軒丸瓦について、畿内經由の百濟系のもの、高句麗百濟系のものが北部九州のなかで展開したと考えている。

筆者も基本的にはこの考えに賛同しているが、鞠智城の軒丸瓦に関しては、「外縁の下半がない」という特徴が気になってくる。瓦当部に出来上がった行基式丸瓦を被せただけの「丸瓦被せ技法」の軒丸瓦は日本列島では、筑前大宰府政庁(月山東官衙・日吉官衙・藏司官衙・国分松本遺跡出土、030型式: 7世紀後半~末)、肥後鞠智城跡(7世紀後半~末)、武藏高麗郡高岡庵寺(8~9世紀)でしか確認されておらず、朝鮮半島においても忠清南道千房遺跡(7世紀後半)(公州大学校博物館1996)でしか確認されていない(図20)。

忠清南道は旧百濟地域であり、この千房遺跡を百濟寺院と考えることも可能であるが、出土軒丸瓦の文様は古新羅系で、筆者は660年の百濟滅亡後に新羅瓦を用いて創建された新羅寺院と考えている。ということで、類例が少なく、不確実ではあるが、丸瓦被せ技法は新羅系の技法ではないかと推測している。さらに大宰府政庁関連遺跡で出土している030型式の軒丸瓦は6弁であり、百濟瓦にはほとんど見られず、高句麗瓦や新羅瓦に多い。そして、鞠智城跡の軒丸瓦は8弁ではあるが、中房のまわりに溝を持つ。この特徴も新羅瓦に比較的見られる特徴である。また、遠く関東の武藏高岡庵寺の瓦は蓮華文がかなり崩れ、8~9世紀のものと考えられているが、中房内蓮子が1個という特徴は基本的に高句麗瓦の特徴であり、弁数も6弁である。

以上のように、肥後鞠智城跡の軒丸瓦に関しては、筆者は近年新羅系の可能性を考えている。古く島津義昭・鶴嶋俊彦ほか(1983)は百濟系と考え、筆者もそのように考えていたが、途中から新羅系

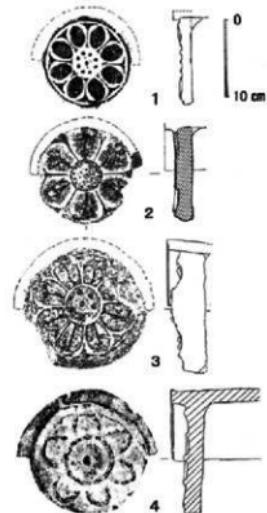


図20 日韓の丸瓦被せ技法の軒丸瓦(1/6)
1.忠清南道千房遺跡
2.太宰府政庁月山東官衙跡
3.肥後鞠智城跡
4.武藤高岡庵寺



図21 日韓の軸摺金具関係資料

の可能性を考えるようになり、中山圭（2005）は百濟系・新羅系の可能性を考えている。

軸摺金具 軸摺金具は門の扉の回転軸に使用される金具で（図21）、日本列島では古代寺院の大和山田寺跡（641年造営開始～7世紀末創建完了？）東面回廊中央扉口（SX065）地覆石に穿たれた軸摺穴の中に残された金具（奈良文化財研究所2002、p.109-Fig.32）と古代山城では2006年に確認された筑前大野城跡北石垣城門跡金具と2014年に確認された肥前基肄城跡東北門跡の唐居敷の軸摺穴に残された金具がある（小澤2016）。朝鮮半島ではそれ以前から少しづつ確認されていたが、日本列島での確認によって両地域の山城の資料がさらに検討されることになった（山田2011、車2016など）。

この軸摺金具およびこれを使用した唐居敷の軸摺穴の形などを検討した小澤は大和山田寺跡東面回廊跡例と肥前基肄城跡東北門跡例、そして大野城跡の円形の浅い軸摺穴を持つ唐居敷（太宰府口城門跡推定Ⅰ期、坂本口城門跡、水城口城門跡など）と鞠智城跡の各城門の唐居敷などを7世紀中頃の日本列島初期のものとし、方形で深い軸摺穴をもつ大野城跡北石垣城門跡・小石垣城門跡・クロガネ岩城門跡・太宰府口城門跡Ⅱ期唐居敷、備中鬼ノ城の方形軸摺穴唐居敷などを7世紀後半～末頃に比定している。そして、前者は百濟系、後者は新羅系と推測している。

大野城跡北石垣城門跡出土の軸摺金具（図21-2）は鋳鉄製品で、7世紀以前の舶載鉄製品を除くと最古段階のものとなる可能性があり、大野城築城・繕治段階に百濟からの渡来人やそれ以前の渡来系の人々によって作られた可能性があるのである^②。

4. 渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺跡・遺構・遺物の系譜

これまで、古代山城にみられる渡来系の知識・情報・技術について、遺跡・遺構・遺物を対象に簡単に整理してきた。以下、それらの系譜について簡単に整理してみたい（図22）。

まず、筆者は西日本の古代山城の発注者はヤマト王権と考えている。次に、具体的な場所の選定はだれが行ったのか。663年の白村江の戦いにおける敗戦を契機として、664年に筑前水城、665年に長門城、筑前大野城、肥前基肄城が築かれ、そして667年に対馬金田城、讃岐屋嶋城、倭国高安城が築かれ

た。小田富士雄は肥後鞠智城もこの時に築かれたと考えている。筆者も備中鬼ノ城はこの667年頃に造営されたと考えている（亀田2009）。朝鮮半島から大和までの陸・海の交通の要衝に山城を築く意図があり、備中鬼ノ城もこの意図に沿って瀬戸内海の東西交通の要衝である吉備のこの地に屋嶋城とともに築かれたと考えている。

そうすると、備中鬼ノ城の場所を選んだ人物は、少なくとも山城を使っての防御体制を理解している人物と考えられる。筆者はこのような山城の配置を考え、防御網を描くことができた人物は純粋な倭人ではなく、「日本書紀」天智天皇4年（665）条の百濟滅亡前後に日本列島に渡って来た將軍・貴族たち、またはそれ以前に日本列島に来ていた渡来系の人物、その子孫たちであったと考えている。達率憶禮福留と達率四比福夫のような人物が備中鬼ノ城築城に関わり、指導して選地・縛張などを行ったのではないかと考えている。

実際の工事はだれが行ったのか。吉備は瀬戸内海交通の要衝であり、選地・縛張を行った達率クラスの人物がこの地に張り付いて指導し、造営した可能性も十分考えられるが、やはり実際の工事においては、現場監督のような現地で指導する人物が必要である。少なくとも、この地の陸路・海路などの交通網、土地の様子を知る人物が必要である。つまり、このような現場監督、現地指導者には、將軍たちの補佐クラスの人物と地元のそのようなことを手伝うことができる人物、渡来系の人々がいたと考えることが素直であろう。

こうして、実際の築城に必要ないろいろな技術者、土壌を築く、版築を指導する、足場を組む、石材を加工する、水門を含めた石積み城壁の石を積む、門を建てる、角楼を造る、城内の管理棟・倉庫を建てる、それらの工事に使用する鉄製工具類を作る、工事に必要な土・石・木などの素材、実際の作業を行う人々をどのように集めるのかが、現場監督およびその周辺の作業チームの仕事になるとを考えている。このような総合プランナーはやはりある程度の経験者でなければ難しいのではないであろうか。

百済から亡命してきた人々の中のこのような知識や技術を持った將軍、工兵部隊の責任者クラスの人々などが、地元のそのような作業を行うことができる技術者（おもに渡来系の人々、そして一部倭人）や実際の作業をする人々（おもに在地の倭人たち）を集め、築城していくのではないであろうか。

以上のような想定をすると、「備中国大税負死人帳」に記された人々やその親兄弟の中に備中鬼ノ城の築城や修繕に参加した人物もいたかもしれない。さらに地元である賀夜郡の人々だけでなく、備中国全域の技術者や作業者が動員された可能性は高いのではないだろうか。少なくとも近隣の都宇郡、窪屋郡、そして下道郡の人々は動員された可能性が高いと思われる。

備中鬼ノ城にはほかの古代山城には見られない多様な特徴がある。例えば、角楼の下部の石垣やその上部の版築の土壁に縦方向の柱の痕跡が残っている。このように城壁の中に柱痕跡が残る例は高句麗や朝鮮半島中部地域の高句麗と関わる可能性がある山城にみることができ、現時点では西日本の古

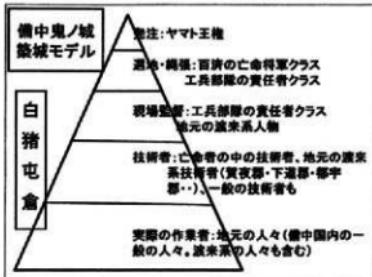


図22 備中鬼ノ城築城に関わった人々

代山城には見ることができず、鬼ノ城の築城技術に関する一つの特徴になっている。鬼ノ城の城壁上墨前面の石敷きについても現時点で最も近い例は忠清北道稷山蛇山城のものである。この山城については百濟のものと考えられているが、新羅のものではないかという考えもある。

備中鬼ノ城の築城については、弥生時代以前からのこの地の人々、5世紀頃におもに加耶南部地域から入ってきた渡来人たちの子孫、6世紀後半以降に畿内を経由して入ってきた新たな加耶（・新羅）系の渡来人たちの子孫、そして、白村江の戦い前後以降に入ってきたおもに百済系の人々など、多様な人々が備中鬼ノ城築城に関与することではほかの山城には見られない特徴的・個性的な山城が完成したのではないかと考えている。

北部九州の筑前大野城の唐居敷の軸摺金具について、小澤佳憲は創建時のものは百済系、繕治のものは新羅系の可能性を呈示し、肥後鞠智城跡の軒丸瓦については、百済系、高句麗・百済系、百済系・新羅系、新羅系の可能性が提示されている。

5. おわりに

以上、西日本の古代山城について、渡来系知識・情報・技術を意識して、述べてきた。660年の百済の滅亡、663年の白村江の戦いにおける敗戦、そして多くの百済系の人々の亡命・移住などを背景に、百済の亡命貴族（將軍）たちの指導のものに朝鮮式山城が築かれたという『日本書記』の記録などから古代山城は百済系の技術によって築かれたと一般的に考えられている。確かにそれはその通りであるが、具体的な構造や遺物を細かく検討すると、少なくとも百済のみの技術で築かれたとは考えづらい。それまでに日本列島に渡って來ていた多様な朝鮮半島の人々も古代山城築城には関わっていたと考えることで、各地の古代山城の多様性や個性が説明できるのではないかと考えている。

小稿をなすにあたり、下記の方々にお世話になった。末筆ながら記して謝意を表したい。失礼ながら敬称は省略させていただいた（五十音順）。

小田富士雄、角田徳幸、高正龍、丹羽崇文、松波宏隆、向井一雄

【註】

- (1) 最近、広島県内で古代山城研究会の方々と地元の中世山城などを研究されている方々が共同でその可能性がある場所を踏査され、現在その確認作業が進められている。公刊されたものとして、松尾洋平2023「古代山城 芙城（ねばらのき）推定地の合同踏査について」『備陽史探訪』229、2-4 がある。
- (2) 古墳時代以前の鉄製品としては、比較的多く出土している各地の鋳造鉄斧以外には、兵庫県加古川市行者塚古墳（5世紀初め）と和歌山県紀の川市貴志川丸山古墳（5世紀）の鏡、大分県日田市ダンワラ古墳（5~7世紀）の金銀錯嵌珠龍文鉄鏡（きんぎんさくがんしゅりゅうもんてつきょう、鏡は弥生時代のもの）などがあるが、極めて少なく、これらはいずれも舶載品と考えられている。6世紀末以降になると、古代寺院の湯釜などに鉄釜が作られ、使用された可能性があるが、具体的な事例としては奈良県川原寺北東部で7世紀末頃の鉄釜鑄造遺構が検出されている（奈良文化財研究所2004）。本文中の山田寺東回廊の地覆石の軸摺穴に残された鉄製品が鉄製品であり、641年~7世紀末の創建段階のどの時期のものにもより、さらに大野城跡の軸摺金具が665年の初築時のものか、698年の繕治時のも

のかにもよるが、いずれにせよこれらの資料が日本列島における鉄製品の最古段階のものとなるようであり、大野城跡の軸摺金具は飛鳥地域から寺院の鉄製関係の工人が来た可能性もあるが、百濟からの亡命者のなかの工人が作った可能性はあるものと考えている。

〔引用・参考文献〕（50音順、韓国・中国の名前は、日本語読みにして50音順に並べた）

泉武2018「前期難波宮孝徳朝説の検討」『櫻原考古学研究所論集』17、八木書店、66-77

入佐友一郎・小澤佳憲編2010「特別史跡大野城跡整備事業V」福岡県教育委員会・福岡県文化財調査報告書225

大阪府立狭山池博物館2021「狭山池のルーツ—古代東アジアのため池と土木技術—」

岡山県古代吉備文化財センター編2001「下庄遺跡・上東遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157

岡山県古代吉備文化財センター編2006「国指定史跡鬼城山」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告203

岡山県古代吉備文化財センター編2013「史跡鬼城山2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告236

岡山市教育委員会文化課編1989「大廻小廻山城跡発掘調査報告」

小澤佳憲2016「日韓の古代山城出土軸摺金具」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、74-76

小田裕樹・次山淳・豊島直博・竹本晃・市大樹・黒板貴裕・関広尚世2008「石神遺跡（第19・20次）の調査—第145・150次」「奈良文化財研究所紀要2008」90-107

小田富士雄1977a「百濟系単弁軒丸瓦考・その一」『九州考古学研究・歴史時代篇』学生社

小田富士雄1977b「百濟系単弁軒丸瓦考・その二」『九州考古学研究・歴史時代篇』学生社

小田富士雄編1983「北九州瀬戸内の古代山城」日本城郭史研究叢書10、名著出版

小田富士雄編1985「西日本古代山城の研究」日本城郭史研究叢書13、名著出版

小田富士雄2013「鞠智城創設考」「古代九州と東アジア」同成社、146-166（小田2012「第V章 第1節 鞠智城の創建をめぐる検討」熊本県教育委員会編『鞠智城跡II—鞠智城跡第8~32次調査報告—』熊本県文化財調査報告276、407-426に一部補足）

小田富士雄2016「大宰府都城I期軒丸瓦考」「古文化談叢」75、九州古文化研究会、193-209

小田富士雄編2016「季刊考古学」136、雄山閣の中に、小鹿野亮「阿志岐山城跡」、小田富士雄「おつぼ山神籠石」、亀田修一「神籠石系山城と朝鮮半島の山城」、下原幸裕「大野城（福岡県）」、杉原敏之「水城（福岡県）」、田中淳也「金田城（長崎県）」、田中正弘「基肄城（佐賀県）」、平井典子「鬼城山（鬼ノ城）」、矢野裕介「鞠智城（熊本県）」、山田隆文「高安城（奈良県）」、渡邊誠「屋嶋城（香川県）」などが収められている。

春日市教育委員会2000「大土居水城跡」春日市文化財調査報告書28

龟田修一1995「日韓古代山城比較試論」「考古学研究」42-3、pp.48-66

龟田修一2001「朝鮮半島の石造物と龜」千田稔・宇野隆夫編『龜の古代学』東方出版、56-75

龟田修一2002a「朝鮮半島古代山城の見方」編集代表西谷正『韓半島考古学論叢』すずさわ書店、545-575

龟田修一2002b「吉備の瓦塔」「環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—」古代吉備研究会、429-454

龟田修一2009「鬼ノ城と朝鮮半島」岡山理科大学「岡山学」研究会編「鬼ノ城と吉備津神社—桃太郎の舞台」を科学する」吉備人出版、58-71

龟田修一2012「対馬金田城小考」「百濟と周辺世界」成周鐸教授追慕論叢刊行委員会、810-830

龟田修一2014「古代山城は完成していたのか」熊本県教育委員会編『鞠智城跡II—論考

編1—』17-40

龟田修一2015「古代山城を考える—遺構と遺物—」岡山県古代吉備文化財センター編『古代山城と城柵調査の現状』全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会、1-26

龟田修一2016a「西日本の古代山城」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社、574-595

- 亀田修一2016b「神籠石系山城と朝鮮半島の山城」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、93-96
- 亀田修一2018a「日本列島古代山城土壁に関する覚書－版築・板壁について－」『水利・土木考古学の現状と課題Ⅱ』ウリ文化財研究院（大韓民国）、325-348
- 亀田修一2018b「古代山城の成立と変容」熊本県教育委員会編『鞠智城・古代山城シンポジウム－古代山城の成立と変容－』1-11
- 亀田修一2021「古代山城と地域社会－備中鬼ノ城を中心として－」熊本県教育委員会編『令和2年度（2020年度）鞠智城座談会 地域社会からみた鞠智城』17-31
- 亀田修一2022「第2章 日本の考古学－西日本の古代山城－備中鬼ノ城を中心に－」亀田修一・白石純編『講座 考古学と関連科学』雄山閣、21-38
- 姜鍾元・崔ヨンファ編2007『錦山栢嶺山城－1・2次発掘調査報告書－』忠清南道歴史文化院（韓国）
- 漢陽大学校博物館2006『二聖山城－二聖山城発掘20周年記念特別展』（韓国）
- 金善基・趙相美2001『益山猪土城試掘調査報告書』圓光大学校馬韓・百濟研究所（韓国）
- 金秉模・沈光注編1988『二聖山城－2次発掘調査中間報告書』漢陽大学校博物館（韓国）
- 吉林省文物考古研究所・集安市博物館2004『丸都山城』文物出版社（中国）
- 栗原和彦編2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館
- 九州歴史資料館編2009『水城跡』
- 熊本県教育委員会編2012『鞠智城跡II－鞠智城跡第8～32次調査報告－』熊本県文化財調査報告276
- 熊本県教育委員会編2023『鞠智城シンポジウム2022成果報告書－渡来系技術から見た古代山城・鞠智城』
- 百濟古都文化財団編2018『扶余羅城 東羅城IV－陵山里山区間 雄・城壁－』（財）百濟古都文化財団発掘調査研究報告69（韓国）
- 公州大学校博物館編1996『千房遺跡』（韓国）
- 国立公州博物館1999『大田月坪洞遺跡』国立公州博物館学術調査叢書8（韓国）
- 国立扶余博物館2003『扶余羅城』国立扶余博物館遺跡調査報告書10（韓国）
- 国立文化財研究所2002『風納土城II－東壁発掘調査報告書－』（韓国）
- 古代山城研究会1996『諏岐城山城跡の研究』『満瀬』6、1-48
- 西条市教育委員会2016『史跡永納山城跡保存整備基本計画書』
- 島津義昭・鶴嶋俊彦ほか1983『鞠智城跡』熊本県文化財調査報告59
- 車勇杰2016『韓國山城の懸門構造』小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、63-68
- 鎌木拓也2011『文献史料からみた古代山城』『条里制・古代都市研究』26、条里制・古代都市研究会、13-28
- 橋山洋2014『東アジアに開かれた古代王宮 離波宮』新泉社
- 全赫基2022『韓國の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題』『令和3年度鞠智城跡「特別研究」論文集 鞠智城と古代社会』10、熊本県教育委員会、79-98
- 総社市教育委員会2005『古代山城鬼ノ城』、同2006『古代山城鬼ノ城2』
- 総社市教育委員会2011『鬼城山－国指定史跡鬼城山環境整備事業報告－』
- 大平村教育委員会2003『唐原神籠石I』大平村文化財調査報告書13
- 大平村教育委員会2005『唐原山城跡II』大平村文化財調査報告書16
- 高岡寺院跡発掘調査会編1978『高岡寺院跡発掘調査報告書』
- 高松市教育委員会編2016『屋嶋城跡－城門構造整備事業報告書』高松市埋蔵文化財調査報告172
- 田中俊明2014『朝鮮三国における八角形建物とその性格』熊本県教育委員会編『鞠智城跡II－論考編2－』31-51
- 中山圭主2005『鞠智城出土の軒丸瓦－朝鮮式山城古瓦の一様相－』『九州考古学』80

- 奈良文化財研究所編2002『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報63
- 奈良文化財研究所編2004『川原寺寺域北限の調査—飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告一』
- 西住欣一郎2014「鞠智城跡貯水施設跡について」熊本県教育委員会編『鞠智城跡II—論考編1—』83-95
- 藤澤一夫1981「難波宮八角建築の性格」歴大阪市文化財協会編『難波宮址の研究 第7 論考篇』7-18
- 扶余郡文化財保存センター2013a『扶余羅城整備事業 扶余羅城一北羅城I—青山城試掘調査一』(財)扶余郡文化財保存センター発掘調査研究報告23(韓国)
- 扶余郡文化財保存センター2013b『2010扶余古都保存事業 扶余羅城一北羅城II—』(財)扶余郡文化財保存センター発掘調査研究報告27(韓国)
- 漢哲夫2022『難波の古代史』ブイツーソリューション
- 向井一雄1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』27、地域相研究会、7-38
- 向井一雄2014「鞠智城の変遷」熊本県教育委員会編『鞠智城跡II—論考編2—』75-105
- 向井一雄2016「西日本山城の城門構造」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、58-62
- 向井一雄2017『よみがえる古代山城』歴史文化ライブラリー440、吉川弘文館
- 村上幸雄・乗岡実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備考古学ライブラリー2、吉備人出版
- 森公章1998『「白村江」以後』講談社選書メチエ
- 山口裕平2003「西日本における古代山城の城門について」『古文化談叢』50(上)、九州古文化研究会、65-95
- 山田隆文2011「鉄製の門扉軸掛金具について」「勝部明生先生喜寿記念論文集」勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会、404-413

〔引用挿図〕 (いずれも一部改変引用)

- 図1：村上・乗岡1999、図2：総社市観光プロジェクト課提供、図3・12-5：総社市2005、図4・14-1・3：亀田1995、図5：中原文化財研究院2012『江華玉林里遺蹟』、図6-1・図7-3・図8-1~3・図9-1~3・図10-2・図11-2・図12-1・4・図14-2・4・図15-④：亀田撮影、図6-2：九州歴史資料館2010『大宰府 その榮華と軌跡』、図7-1：金・趙2001、2：岡山市1989、図10-1：車勇杰氏提供、図11-1：百濟古都文化財团2018、図12-3：東潮・田中俊明1995『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社、図12-3：国立公州博物館1999、図12-6：姜・崔2007、図13-3：明日香村教育委員会2006『酒船石遺跡発掘調査報告書』p.56、図15：亀田2002a、図16-1：吉林省・集安市2004、図16-2：藤澤1981、図17・20-3：熊本県2012、図18-1：忠南大学校百濟研究所2005『大田鷄足山城』、図18-2：岡山県2013、図19：小田2016、図20-1：公州大学博物館1996、2：栗原2000、4：高岡寺院跡発掘調査会1978、図21：小澤2016、図22：亀田作成

朝鮮三国の山城と鞠智城

田中 俊明（滋賀県立大学名誉教授）

朝鮮三国とは、高句麗・百濟・新羅の三国を指す。この三国では山城が大きく発展した。ただし三国それぞれの特徴は異なる。これらの地域の山城のいくつかをとりあげ、その特徴について述べ、鞠智城を考えるときの材料を提供したい。

1. 夫余

漢族の地域において、城郭は古くから造られている。中原地域の河南省には殷王朝の時期にあたると考えられる紀元前2千年紀の城とみられる偃師商城・鄭州商城などが残り、夏王朝までさかのぼる可能性もある。しかしそれらは、基本的に平地の土城である。黄河流域を中心とした中原の黄土地帯において、同質土で版築する（夯土）土城が一般的であり、現在までよく残っている。しかし山城を見ることはほとんどない。山城は周縁地域にみられるもので、ここにとりあげる中国東北地区ではむしろ山城が基本である。なお、中原地域以外では版築は粘質土を交互に挟む必要がある（例えば時代は降るが、遼の上京城〔内蒙古巴林左旗〕などにもみられる）。

朝鮮三国をとりあげる前に、「東夷」世界のなかで最も先進的で、漢文化にも近い夫余についてみておきたい。

夫余の当初の本拠地とみられるのは、吉林省吉林市である。市街の中心部をとりまくように第二松花江が流れるが、その東岸に東团山がある。海拔252m（比高60m）の独立丘陵である。橢円形の土石混築の城壁を三重にめぐらしている。『魏志』夫余伝に「城柵は円形に作り、牢獄に似ている」とあり、それに該当するとみられる。吉林市の西北にある九台県でも小規模の円形の城址が確認されており、夫余の遺構ではないかとされている。

吉林省九台県は、吉林市と農安市との間にあるが、その県城の北80kmの上河湾鎮に七基の山城がある。康家興「吉林九台上河湾考古調査」（『考古』1961年3期）によれば、1959年8月に吉林省文化局と九台県文化館・上河湾人民公社文化館の共同で、現地調査を行っており、また1960年春には長春地区文物普查隊が調査をしている。その後吉林省文物志編委会『九台県文物志』（同会、1986）の作成にあたって、



図1 駿州商城
（宮本一夫『中国の歴史01 神話から歴史へ』講談社、2005）

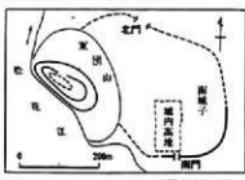
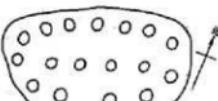


図2 九台山城平面図



80年代にも調査をしているようである。それによれば、城内に多くの円形の坑があり、住居址かとみられる。従って、高地性の集落を城壁で囲んだものというべきである。城壁は、土・石・土石混築のものがあるが、文字どおりの柵は確認されていない。城柵というのはそういう成語であって実際に木柵などが構築されていたかどうかは別の問題である。

2. 高句麗の山城

高句麗は夫余から出たとみることがあり、高句麗人自身もそのように言っている記事がある。しかし現実には、民族的系統ではなく、先進大国の夫余に対する意識が強く、その当初の本拠地（吉林省）を奪取したあと、夫余と同族であると主張するようになる。

高句麗では多くの山城が造られているが、基本的には居住性がない。戦時にやや長期に立てこもることがあり、その痕跡が残ることがあるが、通常は近傍に居住空間があり、山城はいわゆる「逃げ城」である。その点は夫余とは異なるものであり、城郭史の系譜としては異なるというべきである。

高句麗は、広開土王の領土拡大をへて、5世紀の後半、長寿王の時代に最大版図を実現した。すでに王都は平壌に遷っており、それを中心にすれば、西北は遼河まで、東北は現在の吉林省吉林市と延辺地区珲春を結ぶラインまで、南は朝鮮半島の中部、韓国の忠清南道の北部から慶尚北道の北部を結ぶラインまでおよぶ、きわめて広大な領土となった。そのご南方の境界は、新羅の成長によってしだいに後退していくが、西北・東北の領土はほぼ最後まで維持される。この広大な領土を支配するうえで、高句麗は各地に山城を築き支配の拠点とし、かつ防御施設とした。山城を中心とした支配は高句麗文化の大きな特徴であり、百濟や新羅にも影響を与えていた。ここではいくつかの山城をとりあげ具体例に即して高句麗の防御体制や地方支配の実態について述べることにしたい。

高句麗の発祥の地は、鴨緑江中流とその支流渾江の流域である。最初の都は卒本（忽本）といい、現在の遼寧省桓仁県にあたる。

高句麗の王都は、その後、中期=国内（吉林省集安市）、後期=平壌（北朝鮮）と変遷するが、平壌時代の後半を除いて山城と近傍の居城とのセット関係で成り立つ。卒本時代の山城は桓仁鎮の北東



朝鮮三国王都の位置と変遷
●は王都、数字は遷都年を示す。境界線は510年。（）は現代地名。



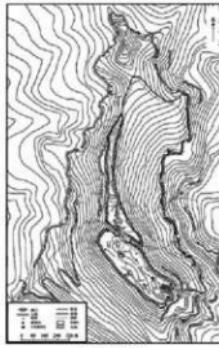
〔高句麗の歴史と遺跡〕

約8km、渾江の北側に位置する五女山城である。海拔820mで、玄武岩の岩壁がそそりたつ勇壮かつ怪異な山である。頂上部は平坦で、池（天池）とふたつの井戸がある。城壁は頂上部から200mほど降りた東側山腹を南北に弧形で1000mほど走り、南端で西に折れて小点将台下の稜線をのぼるかたちでさらに120mほどづく。

両側から積み上げる夾築で、外側の高さは6~8m、内側は1~2mである。外壁は大きい石を2~3層積み、その上に奥がせまい楔形のやや小さい石を整然と積み上げる。高いところでは27層におよぶ。下段は階段状に、少しづつうしろにずらして積むが、それは高句麗の築造法の特徴である。

遺物は、発掘の際に多量出土し、例え袋状鉄斧などは紀元前後までさかのぼりうるもので、高句麗前期の遺物を含んでいることはまちがいない。これを通して、五女山頂上部が高句麗前期の活動拠点であったことが確認できる。それをふまえれば、城壁の築造法や構造が高句麗的である五女山城が高句麗の山城であることは、もはや問題ないといえる。ただし、現存する城壁がはたして高句麗前期までさかのぼるものかどうかは、なお未確認といわなければならない。山城としての使用開始時期と、現存城壁の築造時期は、かなり同じではない。その点でいえば、桓仁・集安地域の山城を高句麗「早期」の山城ととらえ、その築造法を「早期」のものとみなして、山城築造法の変遷を考えることがあるが、それは方法的に問題である。この地域の山城は確かにほとんど前中期の重要な山城といえようが、そのまま現存城壁の年代とみるのは短絡である。五女山城の場合も、東門付近の城壁は、積石塚の基壇部の発展過程などもふまると、3~4世紀までくだらせて考える必要がある。この特異な地形を擁する山城は、頂上部を守るために、亀裂部分を守れば十分で、絶壁をよじ登ることはほとんど不可能である。まさに天然の要害であり、ことさら城壁を築かなくてもよいとも思える。あるいは当初は、城壁を築かなかったかもしれない。

このように、城壁そのものについては、なお保留せざるをえないが、山城としては高句麗前期までさかのぼるとてもおかしくない。そのいっけん異様な山容は、靈なる山として畏敬の念を与えるにじゅうぶんもある（遼寧省文考所編『五女山城』文物出版社、2004）。なお近傍の居城といえるの



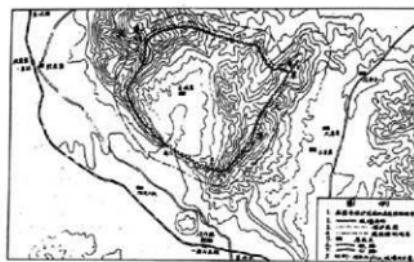
は、漢の玄菟郡の県城に由来するとみられる西側の下古城子土城ではなく、東側の喇哈城とみるべきである（『広開土王碑』に「忽本の西の山の上に築城した」）。高句麗の住地には前107年に武帝が玄菟郡を置き、高句麗はその圧力に対する抵抗のなかで力をつけ、興起していった。県城を奪い取った高句麗は、それを利用するとともに、近くに山城を造った。

高句麗山城は、特に遼東方面において、名の残る巨大山城が多い。周長2kmを越えれば大型山城というが、そうした大型が多い。名が知られるのは、隋・唐の侵略の際の記録が残るからである。その中のいくつかをとりあげてみる。まず最大拠点となった烏骨城である。烏骨城に比定されてほぼまちがないのが、鶻河をさかのぼった鳳城市にある鳳凰山山城である。

鳳城市街の南に海拔930mの鳳凰山がある。遼東隨一の名山とされ、奇岩峭壁のつらなる勇壮な山である。この鳳凰山とその東南の海拔765mの高麗山との稜線をつなぐかたちで、ふたつの山がつくる谷というより小盆地を開んでめぐる巨大な山城が鳳凰山山城である。自然の岩盤を利用しておらず、すべて城壁をつくっているわけではないが、全長15~16kmある。谷は北東から南西にかけてはしるが、南北側が大きく開いている。両山からのびる稜線は麓に達して低い丘陵となるが、そのあいだの平地をむすぶあたりに南門址があった。正門である。現在は、東半に軍の倉庫がたち、よく確認できない。いっぽう北門址は両山の鞍部で、かなり高い位置にある。北へぬける通路のかたわらに石積みが残る。その門址の左右の稜線に、整然と積み上げた城壁がよく残る箇所が多い。急角度の傾斜面で、もともと連続して積んでいるわけではないが、残りのよいところで高さ6mほどある。北門をぬけると、大きく谷がひろがっており、北から登るのは容易ではない。

『翰苑』注に引く『高麗記』は、焉骨山とよび「國の西北にある。高句麗人は屋山という。平壤の西北七百里にある。東西の二嶺は、千仞の高さで壁立する。ふもとからいただきまでみな蒼石である。岩山が高くそびえるようすを遠望すれば、荊門の三峡に似ている。上には草木もないが、ただ青松が生えており、幹は雲表に達する。高句麗は南北の峠口に段を築いて城としている。この城は夷藩の枢要のところである」と詳述している。現状とかわらない状況がよくうかがえ、伝聞ではなくじっさいの見聞であろう。「夷藩の枢要」とあるのは、そのとおりで、645年の唐の侵攻のさいに、安市城の救援にむかって逆に唐軍にとらえられた高延寿・高惠真は、安市城を攻めあぐねる太宗に次のように進言している。「烏骨城の梅薩は年老いて堅守することができません。兵を移してそれに臨めば、朝に至ってタバには勝つことなるでしょう。とおりみちの小城も風になびいて降伏するはずです。その後に食糧を収め、鼓行して進めば、平壤はかならずや守ることができません」と。梅薩（梅薩）は大城に置かれた地方官で、都督にあたる。他の城・小城とは格がちがう。ここがおれば、付近の小城が戦わずして降るというのも、けっして誇張といえない。

石築山城の例をもうひとつあげる。高句麗の西への進出は、蘇子河から渾河を経て玄菟郡に向かう

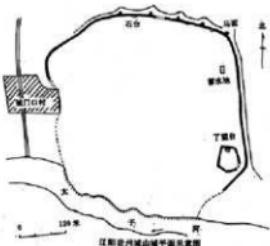


ルートと、太子河から遼東郡に向かうルートが2大主要路である。太子河は本溪の西のダムをすぎると大きく屈曲して東北流し、大きな岩盤にぶつかってふたたび西に流れをかえる。その岩盤の上に燕州城がある。東南に高く、西の城門口村にかけて低くなる独立丘陵の上で、太子河に面する東南側は絶壁のため城壁を築かないが、ほかは堅固に積み上げられた石壁で、周長約2500mある。西南の門址は集落のなかで最近調査された。すぐ西に小高い丘陵があり、城壁はその上をのぼり、西北の門址にむかっていったんさがっていく。ゆるやかな傾斜をあがっていく北壁は高さ7m前後あり、幅4m余ある。外側に雉が5ヶ所以上あり、それとは位置をずらして城壁に登る城台が5ヶ所ある。それぞれ約70mの間隔をおいている。雉は幅5m、長さ5.30mで、下段は大きな切石を階段状に積み、角をまるく整えている。東南の最高所は海拔200mで、後代の烽火台址があり、その周縁を石壁が囲んでいる。城内からは、太子河下流方面から攻めてくる敵を見通すのは絶好であるが、またぎやくに城外から城内はよく見通せ、隠れようがない。

燕州城は、高句麗の白巖城にあてられる。白巖はまた柏崖・白崖・白石とも表記する。高句麗には蒼巖城（わたしは五女山城とみる）もあり、岩盤に立地する山城の印象による命名かとみられる。唐は巖州とし、遼もそれをうけて巖州とした。燕州はそれと音通であり、つまり巖州城ということである。中国史書では、『隋書』にみえるのが早いが、『三国史記』には、547年に改築し、551年には突厥が来攻したとみえている。高句麗が遼東郡治（平地城）を奪取したあと、その背後のまもりとして築城したものと思われ、早くても4世紀末か5世紀はじめのこととみることができる。『旧唐書』高麗伝では「山に因り水に臨み、四面陥絶す」とする。この城が攻撃をうけたのは、645年であった。城主は孫伐音（孫代音）で、陰曆5月17日、唐軍が遼東城を下すと、降伏の意志を表明したが、すぐにそれを翻し、唐軍は28日から攻撃した。烏骨城ほかから救援が来たが、6月1日には降伏した。攻撃のさいに、皇帝太宗は西北から、李勣は西南から攻めた。西北の城外はゆるやかな傾斜をなし、攻撃しやすい。城壁をとくに高く積み上げているのはそのためであろう。降伏したとき、城内には男女1万余人いたという。他城からの兵も多かったのである。太宗はここを巖州とし、城主を刺史とした。ただし唐軍の退却後は、すぐに高句麗の手にもどることになり、唐も翌年春には州を廢している。

土築山城の例もあげる。難攻不落で有名な安市城にあたるのが、海城の英城子山城である。石築か土築か、どちらが堅固かといえば、どちらも堅固である。山城はどこも難攻不落と言つてよく、陥落するには内応者がいるなどによる。どちらが選ばれるかは、材料調達の問題であろう。

海城市街から東南に7kmの英城子村にある英城子山城である。析木・岫岩へ向かう公路のすぐ東で、ちょうど平野部から山地にはいる入り口をおさえるかたちになっている。集落は城の西南の門をはさんで内外にわたっている。門の両側は版築の土壁を下から高く築いており、そのまま稜線上につづいていく。全体が土城で、周長4kmある。東北の山頂から西南のふたつの谷をとりこんで稜線上に土壁が走るが、ふたつの谷のあいだの中央部におりてくる稜線上にも土壁を築き、ふたつの部分にわけている。門は西北・東北・東南にもある。西北側には外郭があるように見える。

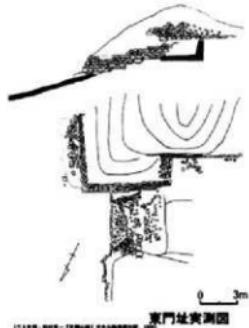


安市城は645年に唐の猛攻をうけた。遼東城・白巖城を降伏させたあと、6月20日に安市城に到着し、攻撃をはじめた。攻撃の前に太宗は、「安市は城が堅固で兵も精銳である。城主は勇敢で、蓋蘇文の乱に際しても服さず、蓋蘇文も下すことができなかつた」として、建安城を先に攻撃する案をもちかけたが、李世勣らの反対をうけ、やはり安市をせめることになったのであった。高句麗ではすぐに、北部の鶴薩の高延寿と高惠真が、東南方面から救援軍15万を率いて安市城に近づき、東南8里に陣した。唐軍は李世勣が安市城の西嶺に陣して高句麗をさそいこみ、長孫無忌が山の北から狭い谷にそってうしろにまわり、太宗は北山に登って観望した。この会戦で高句麗軍は大敗し、両将は唐に寝返った。この北山はその勝利のけっか唐が駐蹕山と改名した。李世勣が最初に陣した西嶺や太宗の陣した東嶺など、それぞれ該当する山もある。

もう1例、撫順の高爾山城をみる。基本土築で、一部石築である。高句麗山城で最も早くに発掘調査がなされた。まず1940年に池内宏・三上次男らが東城の住居址・門址および小城の塔址を中心に、ついで44年に三上次男らが東城の西門址を中心におこなった。56年と63年には撫順市文化局文物工作隊が地表調査して現況を確認した。さらに83年から3年にわたり公園化計画と関連して、撫順市博物館と遼寧省博物館が共同で、東城と南衛城6ヶ所の発掘調査をおこなった。

高爾山城は、西北の海拔230mの將軍峰を最高峰とするいくつかの峰にまたがっており、その頂上から南にのびる稜線上の城壁を境にして、東城と西城とにわかれる。東城が主城であり、高句麗時代の築造で、遼代以後に西城、さらに両城の南側に南衛城、東城の北に北衛城が築かれた。城壁の残高は2~5mで、総長4kmほどになる。東城の南門址は両側に高さ10mの版築土塁が残り、西側には南に26m離れて高さ約5mの版築土塁がある。これらは壘城をなしていたものとみられる。南門址西側に水溝があり、大きな石が残っていた。そこに水口門があったはずである。北門址は両側の城壁が直角にのびる角にあるが、採土のため構造はよくわからない。

門址は東西にもある。40年に発掘された東門址は、門の両側が石壁で、南側がよく残っていたが、階段式に切石を5~6段積む。石積みの内部には小さい割石をつめていた。



3. 百濟の山城

百濟もまた、伝承的には高句麗とともに夫余から出た、としているが、現実には、系譜関係はない。高句麗は貊族であり、百濟は韓族である。民族系統が異なるといえる（ただ先進大国の高句麗と敵対する必要が起り、対等であると政治的に主張するようになった）。山城についてもほとんど関係がない。百濟の山城は基本的に土築であり、前面下段に石築をすることが多い（列石）。規模は2km以

下の小さいものが多い。

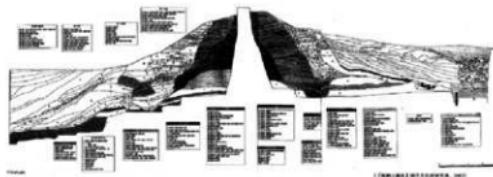
百濟は、漢城（ソウル江南）に発祥し、475年に高句麗の攻撃をうけて漢城王都が陥落し王が殺され滅亡するが、477年にまったく別の場所、熊津（現在の公州）で復活した。そこは急速おちついた先なので、その後計画的に都づくりをして遷都した。それが結果として最後の都となった泗沘（現在の扶余）である。この王都の変遷に即して百濟史を区分すれば、前期漢城時代→中期熊津時代→後期泗沘時代、ということになる。泗沘への遷都は538年であり、滅亡は660年である（そのあと復興運動が3年づく）。

王都の城についてみておけば、高句麗とは異なり、漢城時代には平地の城のみで、熊津・泗沘時代には、山城が造られる。漢城時代は、ソウルを流れる漢江が南北に流れる地点の東にある風納土城と夢村土城に王宮があったと考えられる。なお、王宮の位置は、全時代を通して、まだまったくわかっていない。

風納土城は、ほぼ長方形で、ほんらいは3500mはあったとみられる。平地土城であるが、城壁築造については、山城を考えるときにも資料となる。西壁は漢江の洪水などで流失し、南壁も開発でかなり失われた。1997年の発掘を通して、城内で環濠聚落が確認され、環濠が3世紀前半～中葉に廃棄されたとみられることから、城壁の築造はそれ以後と考えられるようになった。さらに1999年に城壁の調査が実施され、遅くとも3世紀を前後する時期に築造が完了しているものと考えられるようになった。発掘を通して、土城の幅は40mに達することが確認され、高さもほんらい12mほどあったと考えられている。1964年に城内が試掘調査されたことがあるが、その出土土器を通して、築造年代は限定できず、ただ、夢村土城と並行する時期に用いられたことが確認さ

れるのみであった。2011年に漢城百済博物館の展示のために、三回目の断面調査がなされた。この時には、その内部や下層から土器が発見され、年代を限定することができるようになった。その結果、3世紀の中後半に着工して、4世紀中半の以前に初めて完成され、4世紀末と、5世紀中半に増築されて規模が拡大された、という。初築時には高さ10.8mあったと推測され、増築時には13.3mまでになったとされる。延べ人數138万人の大規模工事であったとみられている。

夢村土城は、オリンピックの施設がその一帯に建設されることになり、1983年から発掘調査がはじめられ、遺構の確認によって89年まで継続し、その後はオリンピック公園として復元整備された。築造年代については、城壁の調査において、西晋代の錢文陶器片が出土したことにより3世紀末かとされたが、現在では4世紀以後、風納土城よりも遅れるとみられている。自然丘陵を用い、稜線に沿って高さ



を調節するために版築する。城壁に石灰の痕跡が残り、『三国史記』にみえる「蒸土築城」という語に結び付けている。現在の地表面から高さ6~13mで、幅は40mを越えるところもある。周長は2285mである。当初、木柵で城壁を補完したというようなみかたがされ、現在も一部復元しているが、その後の調査で造営時の永定柱の痕跡であるとみるようになってきた。2013年から漢城百濟博物館附設百済学研究所が発掘を再開し、現在もつづいている。北門の外から、内側の生活空間で、475年にこの地に入った高句麗の道路も確認されている。

中期王都熊津の王城である公山城は、錦江に面し、周長が2660mあり、土城部分が735m、石城部分が1925mである。『新增東国輿地勝覧』卷17・公州牧・城郭条に「公山城」がみえ、注に「州の北二里にある。石築。周四千八百五十尺、高さ十尺。中に井三・池一がある。また軍倉がある。○地元の言い伝えでは、これは百済時代の古城で、新羅の金憲昌が依拠したところである、という」とある。ただし「これは百済時代の古城であるといい伝えている」とする程度で、金正浩『大東地志』にいたって「百済の聖王四年に熊津城を修築したというのがこれである」というように、公山城を明確に熊津城としている。

その後も、公山城が王城であったとみなされてきたわけではない。関野貞も、この地を訪れて城内から扶余の扶蘇山城出土のものと類似する土器片・瓦片を見て、「これは正しく熊川時代の山城であることを始めて推定することが出来て、非常に愉快に感じた」とする程度であった（『百済の遺跡』『朝鮮の建築と芸術』）。今西龍も、公山城を就利山城と混同していたようで「就利山はもと王宮址と伝ふる江辺なるが恰も扶餘に於ける扶蘇山に似たり。此の地には何等の遺物なきものの如し。……新羅王朝時代、王氏高麗時代を通じて今日に至るまでの重要な政治的都市たるにも拘らず、遺物・遺跡の見るべきもの多からざるは遺憾とす」（『百済都城扶餘及び其の地方』『百済史研究』）としている。公州において百済遺跡の調査を進め、公山城が百済の王城であることを明確にしたのは、軽部慈恩であったといえる（『百済遺跡の研究』吉川弘文館、1971）。

公山城の発掘調査は、1980年に公州師範大学（のちに公州大学校）百済文化研究所が実施したのが最初であり、同校博物館（現、歴史博物館）がつづけている。王宮の位置は、城外説もあり、明確ではないが、城内では最も平坦な双樹亭前の広場を有力候補地と位置づけている。近年の城内マウルの調査において、百済時代の15棟の建物址や、貯水施設・竪穴構造・道路・排水路・鉄器工房址などが検出されているが（統一新羅時代の建物址も7棟）、6号建物址と7号建物址のあいだに広場があり、や



図11-3-2 公山城 内マウル 畫面
（『公山城 城内マウル試掘調査』公州大学歴史博物館、2008）



図11-3-3 公山城 内マウル 畫面
（『公山城 城内マウル試掘調査』公州大学歴史博物館、2008）

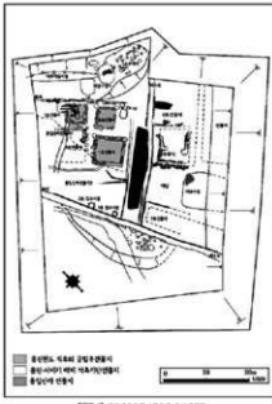
や特異である。6号建物址は、南向きであるが、軸を30度ほど東に振っている。石築の基壇が二重になっており、下段は正方形に近く、一辺約8.5mである。上段には南北760cm、東西630cmの建物基壇がある。壁は、ほかの建物は大壁建物であるが、これは柱穴列は確認できず、瓦片や礎石様の石材もあって、礎石建物であった可能性がある。東西にL字形の煙道がある。このあたりは、王宮に関連する施設と考えられている（李南奭・李賢淑『公山城城内マウル第4・5次発掘調査 公山城王宮関連遺蹟』公州大学校博物館、2016）。

公山城の城壁は現在、石築の部分が多いがそれはほとんど後代の修築によるもので、ほんらいは土築であろう。土城は東門址の外側に少し残っているが、それが百濟時代の築造と確認されている（安承周・李南奭『公山城城址発掘調査報告書』公州大学博物館・忠清南道、1990）。ただし2012年の調査では、その点が明確にはならず今後の課題といえる。

最後の都となった泗沘（扶余）には、街の北側に扶蘇山城がある。1981年に国立文化財研究所・忠南大学校博物館・国立扶余博物館によって軍倉址など城内の発掘がはじまり、今まで調査がつづいている。1988年からの1991年にかけては、国立文化財研究所によって東門址附近が発掘された。その結果、従来、東門址と考えられていた箇所は、百濟時代には土壘が連続しており、後代（統一新羅時代）になってそこを開口して門にしたもので、百濟時代の東門址はそれよりも95mほど離れた北側の下層で検出された。このように、百濟時代の築造以後、統一新羅時代において、単なる補修程度ではない改造があったことが確認できたことは重要であり、逆に、発掘を経ていない地区の城壁・門址等について、外見のみで単純に判断できないことの警鐘となる。

百濟時代の東門址から南側に10m離れた土城内側の瓦積み層である赤褐色粘土層で、「大通」という刻印のある瓦片が2点発見された。「大通」銘刻印瓦は、公州市内の大通寺址でも発見されており、そこが文献にもみえる大通寺址であることを示す最も有力な根拠になっていたものである。「大通」はそもそも梁の年号で、527～529年の間に使用された。「大通」が寺名ではなく、年号を示すとすれば、遷都よりも10年ほど前となり、城壁が遷都に先立って築造されていることを示す資料になる。

全体は包谷式山城で、約2200mある。それを内側で区画する山頂式山城が2つある。北にあるものを泗沘山城とよび周長約700m、南にあるものを軍倉址山城とよび周長約1400mである。ところで、東門址よりも西側の、包谷式山城と、軍倉





址山城との接合部分の発掘調査の結果、包谷式の山城が百濟時代に最初に築造され、山頂式山城の築造時期は、部分的に一～二段階遅いとわかった。近年の発掘でもおよそそれが裏づけられているが、泗沘樓山城の一部が百濟にさかのぼる可能性も指摘されている。

この王都には、羅城が築かれている。扶蘇山城から東に延び、以前に青山城とされていたところで南に折れ（ここまでを北羅城）、山を越えて陵山里寺址の西側を通り、さらに山を越えて錦江河口近くまでつづく（これを東羅城）。かつては扶蘇山城から西に延びる西羅城や、南の山上に延びる南羅城も想定すること

があったが、現在は、西羅城については認める研究者もいるが、なかつたとみるほうが多く、南羅城はなかつたとされるようになった。北羅城や、東羅城の陵山里寺址の西側は発掘され、外側には石築があり、芯の部分は土塁であるというのが基本である。

これ以外の山城について益山（全羅北道）を例にしたい。益山には、王宮里遺跡があり、7世紀前半の離宮とみられるため、まったくの地方ということではない。そこにおける山城をみると、まず益山土城（五金山城）があり、円光大学校馬韓百済文化研究所が1980年と1984年に城壁試掘調査と南門址の発掘調査をし、その後、2016年になって城内の試掘調査、つづけて2018年にかけて4次にわたって発掘調査をしている。「北舍」銘土器や「首府」銘の印章瓦など7世紀百済の遺物が出土している。

知られていなかった西門址も発見されたが、統一新羅時代に廃棄さ

れたこともわかった。周長690mである。また、その東側に金馬堵土城がある。金馬渚という歴史的地名があり、それをまちがえて金馬猪・金馬堵・金馬都などと書き、金馬が脱落して、猪土城・堵土城・都土城などわけのわからない名称になっている。周長370m。1991年と2017年に発掘され、版築土塁と列石がみられる。百済山城の基本形態といえるもので、日本の古代山城の特徴に通じるものである。列石前に柱穴があるが、築造に際して必要であったもので、柵を立てるわけではない。日本でも多く検出されている。



4. 新羅の山城

新羅は、現在の慶州盆地に発祥し、滅亡の935年まで、一度も中心地を遷すことがなかった。王城は月城であり、周間に山城を配している。

新羅の王宮は、基本的に月城にあった。『三国史記』卷34・地理志1に、

当初、赫居世二十一年（前37）に宮城を築き、金城と名付けた。婆娑王二十二年（101）に金城の東南に城を築き、月城と名付けた。または在城と号した。周長一〇二三歩である。新月城の北に満月城がある。周長一八八三歩である。さらに新月城の東に明活城がある。周長一九〇六歩である。さらに新月城の南に南山城がある。周長二八〇四歩である。始祖以来、金城にいたが、後世になると、多く両月城にいるようになった。

ここには、宮城として金城・月城がみており、月城も新月城と満月城に分かれると記している。そして、王は始祖の赫居世以来、金城にいたが、婆娑王の時（101年）に月城を築き、その後は両月城にいるようになった、というのである。

しかしこの記事には、疑問がある。『三国史記』冒頭の卷1・新羅本紀1・赫居世21年（前37）条に「京城を築いた。金城と名づけた」とある。ここには、先の地理志とは異なり、金城を京城のことであると記している。京城とは王都全体のことであるが、宮城はそうではなく、王宮を指すとみるべきである。従って、地理志と新羅本紀の説明が大きく異なることになる。『三国史記』において、すでに混乱があるのである。実態としては、王都全体すなわち京城を金城とよび、宮城を月城とよんだと考えられ、つまり新羅本紀の叙述が正しい。おそらく『三国史記』の編者は、金城と月城との違いについて、よくわかっていないかったと考えられる。

なお、上記の地理志の記事に「または在城と号した」とあるが、月城からは、「在城」銘の瓦が多数発見されている。「在城」とは「王の住まわれる城」の意で、実態に即した呼称といえよう。

始祖の時代、すなわち國の最初から、王都があるのは必然である。伝説上の建国年代を別にして、具体的に「建国」の絶対年代がいつであるのかは、新羅史の理解の上では重要であるが、ここで必要なことは、月城の築造年代である。以前は、上記の婆娑王の記事をそのまま認めて101年築造してきたが、わたしはずっとそれに反対してきた。新羅本紀3・炤知麻立干9年（487）条に「秋七月、月城を修築した」とあり、翌年に「春正月、王が月城に移居した」という記事があるが、それこそが実際に、月城を王宮としたはじまりであると考えていた。しかし實際には、それよりも先行することが近年の発掘調査で確認された。

月城の規模は、報告者によって数値が一定しないが、およそ東西900m、南北260mで、面積は6万余坪。南面は、南川が自然断崖をなしており、ほとんど城壁をつくっていないが、そこを含めて周長約2400mという。城壁は土石



〔『新羅千年の歴史』丹波】2012 慶州國文化財研究所

を混ぜて突き固め、上を粘土で覆ったもので、高さは10~20mある。城内は平坦で、ここに宮殿が並んでいたはずである。2007年にレーダー探索（物理探索）によって、およその遺構配置はわかった。その後、2014年から城内の発掘が始まり、現在に至っている。

A~Dの四地区にわけて年次的に調査が進行している。最初に発掘されたC地区の調査では、17基の建物址、それに重複する九基の建物址が確認され、合計26基の建物址が確認された。それが、殿舎の建物のように、東西建物と南北建物が配置されており、王宮に関連する建物のようにみられる。ただ、今後つづく、全体の発掘を通して考えられなければならない、すこし先のことになる。

月城城壁や城内の調査に先立って、南側の南川に面したところは別にして、周囲の堀（垓字とよぶ）の調査が行われ、その造営時期が5世紀後半であることがわかった。その後、2014年以後、城壁の調査も進み、4世紀に開始され、400年を前後する時期に完成したのが最初であると考えられるようになった（『月城西城壁発掘調査資料集』国立慶州文化財研究所、2021）。北側の垓字は、7世紀末に埋められ垓字としての役割を終えている。東北の一部は、東宮への通路として、護岸石築が作られ造景化した。7世紀後半に月城の性格が変わったことを意味している。

西南部の月城城壁調査によれば、城壁は地山の上に築かれている。これまで自然丘陵を利用し、低いところを補うだけであったとみていたものが、基礎からすべて築かれていることが確認されたのである。城壁調査は進行中で、ほかの地区でもそうであるのか、全体的に造られた丘陵であるのかどうか、今後の調査を待たなければならない。

月城周囲の状況についてみれば、南には南山があるが、その北端に都堂山土城と南山土城がある。それらの南側に南山新城が築造された。これまで10点発見されている「南山新城碑」によって591年築造が確定できる。それに先行して、東に明活山城が造られているが、この場合にも、土城が以前からあったようである。西には西兄山城がある。羅城をもたない新羅都城は、これら周囲の山城が防御に重要な役割をはたしている。明活山城は、近年、北門址附近と城壁の一部が発掘調査された。7世紀以後の遺物がほとんどみられず、その頃には廃棄されたのではないかという意見もある。647年の毗曇の乱に際に反乱軍がここに駐屯し、月城の王軍と対立している。そのことと関わりがあるのかもしれない。

新羅の典型的な山城として知られているのが三年山城であり、忠北報恩郡にある。歴史的にも重要である。470年の築城記事があり、それに従っている。稜線に沿って築造した包谷式山城で、周長1680m。土砂を交えず純粹に石材のみで、板状削石を用い、横口積みと井字形の小口積みを併用して垂直に積む。



5. 朝鮮三国の山城と鞠智城

ここまで朝鮮三国の山城についていくつか例示しながら述べてきたが、簡単に整理すれば、高句麗は山城による領域支配を貫徹した。山城自体に居住性ではなく、山麓や近傍に別の城を築き、両者あい

また拠点を形成した。大型山城が多く、石築・土築とともにあり、技術的には朝鮮三国山城の基本となっている。それに対して百濟は、土築の山城が一般で、規模も小型である。城壁はうぜん版築土塁であるが、下部前面に石を積み上げるもの（列石）がある。新羅は、高句麗山城の影響を受けた部分もあり、石築・土築とともに多いが、列石はみられない。

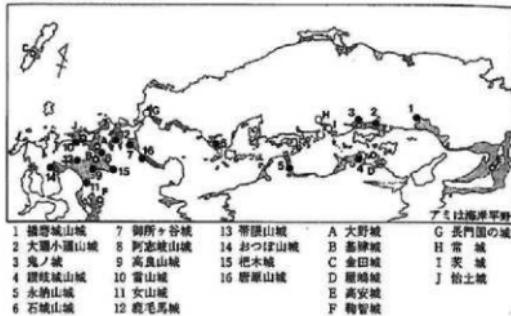


図3 西日本の古代山城分布図

(内井一雄「よみがえる古代山城」)

古代山城構造比較

(内井一雄「山城・神籠石」『古代の山城遺跡』) 文化庁文化財研究会, 2004

山城名	所在地	周長(km)	標高(m)	標高比高(m)	防御構造品目					石材・石材					城門			類型
					土塁・石塁	石垣	斜面	斜面	石門	石垣	石材	石材	石門	石垣	石門	石垣	石門	
1 楊柳山城	長野県木曽郡木曽町	1.8	458	350	67°	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
2 大隅小瀬山城	鹿児島県指宿市・薩摩町	3.4	198	64	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
3 魁城山	奈良県橿原市	2.8	403	230	±-2°	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
4 鶴陵城山城	奈良県橿原市・九条町	6.3	482	270	-6°	土	内傾	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
5 木納山城	奈良県御所市	2.5	128	15	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
6 石城山城	山口県光市・南風原町	2.5	350	230	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
7 鶴谷山	滋賀県守山市・栗東市・瀬田川町	2.9	247	75	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
8 宮山城	滋賀県栗東市	2.8	339	98	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
9 高丘山	滋賀県久美浜町	2.7	252	35	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
10 雲山	滋賀県高島市	2.3	483	300	±	自立なし	内傾	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
11 丸山	滋賀県高島市	3.0	202	41	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
12 丹毛山城	滋賀県守山市	2.2	70	0	±	内傾	斜面	斜面	土壘	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
13 駒形山	滋賀県守山市	2.4	174	91	±	内傾	斜面	斜面	土壘	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
14 おつば山城	滋賀県守山市	1.9	66	0	±	内傾	斜面	斜面	土壘	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
15 佐木城	滋賀県守山市	2.3	130	8	±	自立なし	内傾	斜面	土壘	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
16 鶴原山城	滋賀県守山市	1.7	73	0	±	自立なし	内傾	斜面	土壘	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
A 大野城	福岡県糸島市・宇美町	6.5	410	140	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
B 高峰城	福岡県糸島市	4.4	416	120	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
C 金田城	福岡県糸島市	2.8	276	27	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
D 鶴崎城	福岡県糸島市	4.0	292	260	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
E 高安城	大分県久留米市・豊後高田郡	4.8	488	17	±	内傾	斜面	斜面	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	○
F 鞠智城	福岡県糸島市・福津市	3.7	169	45	±	内傾?	○?	○?	○	野面	石垣	石門	石垣	石門	石垣	石門	石垣	○

日本の古代山城の多くは、百濟的であるとされる。『日本書紀』天智4年(665)条に、

秋八月、達率答椿春初を遣わし城を長門国に築かしむ。達率億礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣わし大野及び様(さ)の二城を築かしむ。

とあるように百濟官人を派遣して築城させており、関係は明白である。達率という高位の官位をもつような高官が築城技術を持っていたとは考えられず、工人たちを従えて指示をしたことであろうが、百濟技術であることは問題がない。記録のない多くの古代山城も、そのような百濟山城の特徴と合致するといえる。

そうしたなかで、鞠智城はやや特異かもしれない。ほかの古代山城に共通する特徴をもちながらも、低い丘陵に立地し、調査の進展にもよるが官衙建物も多く、機能的に異なる点があるようである。ただし、漢城時代の夢村土城なども、似たような特徴を持っており、鞠智城が百濟山城の類型から大きくはずれるということではない。

鞠智城シンポジウム発表要旨 2023

渡来系技術と古代山城・鞠智城
－渡来文化の重層性－

発行年月日 令和5年（2023年）10月1日

編集 歴史公園鞠智城・温故創生館

〒 861-0425 熊本県山鹿市菊鹿町米原 443-1

発行 熊本県教育委員会

〒 862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

印刷 総合企画株式会社

〒 860-0863 熊本県中央区坪井1-2-27



鞠智城シンポジウムの過去の発表要旨や成果報告は、奈良文化財研究所が運営するホームページ「全国遺跡報告総覧」から無料ダウンロードできます。

「全国遺跡報告総覧」はこちら⇒ <https://sitereports.nabunken.go.jp/ja> を検索して
いただとか、右下のQRコードを読み取ってアクセスしてください。



正誤表

箇所	誤	正
37 頁、下から 4 行目	以下、それらの系譜について簡単に整理してみたい（図 22）。	以下、それらの系譜について備中鬼ノ城を中心簡単に整理してみたい（図 22）。

この電子書籍は、渡来系技術と古代山城・鞠智城 — 渡来文化の重層性 — 鞠智城シンポジウム発表要旨 2023 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：渡来系技術と古代山城・鞠智城 — 渡来文化の重層性 —

鞠智城シンポジウム発表要旨 2023

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2023 年 10 月 25 日